た。

『なるほどですつて？　賴りのない先生ですこと』

夫人は憮然とした。

『しかし奥さん、賴りがないと云へば、男よりも女の方が賴りがないですね』

恰度驛前の賑かな通りだつたので、志賀君は何時ぞやのハンドバッグの女を思ひ出したのだ。

『北澤君と僕で、一生懸命に考へたんですけど、到頭判らなかつたです』

と、あの時の有樣とその「問題」を夫人に話した。

『そりや先生、簡單ですわ。きつとその中年の男が、田舍臭い野暮な男で、ハンドバッグの値段のことなど諄々と云ひ並べて、恩を賣らうとしたんぢやございません？　物を買つて貰つても、あまり値段のことなんか云はれると、女は厭氣がさすもんですのよ。投げ付けたくなるかも知れませんわ』

『あ、これは名答案だ。滿點ですね』

志賀君は感心した。

『そりや先生、かういふことは女に限りますわ。學校の先生なんて、何にも御存じないですのね。碁と將棋の區別も知らない先生があるんですつて』

夫人は圖に乘つて威張つた。志賀君は頗る不愉快だつた。碁と將棋の區別を知らないなんて、佐久間の野郎が云つたに違ひない。志賀君は教師の矜持を臺なしにされてしまつた。苦言の先手を打たれ通しである。

四

志賀君は今日、佐久間邸へ家庭教師に行く日なんだけど、行かなかつた。近頃殆どあの家へは寄り付かない。

碁と將棋の問題以外に、依然として夫人が五月蠅く、『そんなに先生が結婚をお嫌ひになるのは、御身體でもおわるいのぢやありませんの？』などと失禮なことを云ふので、それやこれやで先生到頭お冠を曲げちまつたのだ。

この二三日志賀君は、母校の教授の上田博士に賴まれて、博士の家の書庫の整理をしてゐる。今、學期試驗後の休暇で、閑なのだ。

『あの、お茶が淹りましたんですけど――』

部屋の入口で、若い女の聲がした。女中の聲ぢやない。志賀君は振り返つた。

『先生と奥様がお待ちになつていらつしやいます』

さう云ふ彼女の顏を見て、志賀君はハツと目を瞠つた。彼女の圓な眼が、亡くなつた弟の眼にそつくりなのだ。

『有難う。直ぐ行きます』

志賀君は返事も上の空だつた。

弟が死んだのは、彼が物理學校を出た年だつた。弟は中學の二年だつた。苦學をしながら弟を中學へ入れて、やつと自分が學校を出たと思つたら、弟が病氣になつたのだ。寢食を忘れた彼の看病も甲斐なく、弟は死んでしまつた。

彼は弟が可哀相でならなかつた。今迄は學用品も碌に買つてやれなかつた。自分が就職したら、少しは學生らしい生活をさせてやらうと思つてゐたのに、就職も待たずに死んでしまつたのだ。

その頃或る機械工場に口があつた。條件もよかつた。しかし彼は、その方を斷つて、今の中學に來たのだ。中學にをれば、せめて弟に似た生徒にも會へるだらうと思つたのだ。弟に似た生徒は居なかつたけど、彼は中學生を肉身の弟の樣に可愛がつた。この點、教師と云ふものは最初は案外、純粹なものである。或ひは生徒の影響を受けて純粹になるのかも知れない。

しかし幾年かその生活を續けると、純粹が何時の間にか馬鹿に變質する。純粹と馬鹿は親類である。佐久間夫人の所謂「世間知らず」の將棋碁混淆居士が出來上るのだ。

志賀君の如きは、純粹な教師の中でも最も純粹であり、馬鹿な教師の中でも最も馬鹿な方だらう。弟は戀も知らず酒も知らず、映畫も芝居も知らずに死んだ——美しい女を見たり、遊びたいと思ふ時に、志賀君は何時もさう思つて、その慾望を押へた。その習慣が、ピタゴラスの禁慾主義に裏付けされて、彼獨得の生活樣式が出來上つたのだ。しかし一方で慾望を抑へれば、一方でエネルギーを發散させる必要が生れる。それが彼の、硝子板のグレーティングになつたのだ。彼は單純だから、この、一糎平方に千本の線を引く能力は、偏に亡き弟の加護の賜だと信じてゐる。しかし、生れつき彼の視力が鋭くなかつたら、かういふ仕事は出來なかつたらう。彼の目が人並外れて大きいことは前にも云つたが、兄弟は爭はれないもので、弟の目も、まるで蜻蛉の目玉の樣だつた。弟が、友達から「トンボトンボ」と云はれてゐたことを、彼は時々思ひ出して涙ぐむことがある。

ところが、今、部屋の入口に現れた若い女の眼が、まるで蜻蛉の目玉の樣に、圓く可愛いのだ。志賀君は、瞬間、弟に再會した樣な氣がした。志賀君は無遊病者の樣に、書庫を出た。

『翌日この森を出る時、テスは最早昨日までのテスでなくなつてゐた』——「ダーベフイルドの

テス」の中で、彼女がマーロットの森で處女を奪はれた時のことを、ハーディは斯う書いてゐるが、今、ハーディの典雅な筆を借りれば、書庫を出る時の志賀君は、一時間前に其處へ入つた時の志賀君ではなくなつてゐた。

『先生。今の女の人は、だ誰ですか』

博士と夫人がお茶を飲んでゐる洋間へ入るや否や、志賀君は訊ねた。

『いゝお嬢さんでせう。あたしの知り合ひの方の――』

夫人が會心の笑みを洩らした。博士はニヤ〳〵してゐる。

『とても懷しい感じのする女ですね。初めて會つた樣な氣がしません』

志賀君が女のことでこんなに興奮したことは、恐らく初めてだらう。

『ふゝゝ。初めて會つたんぢやないだらう』

博士は好意ある批難の眼を向けた。

『初めてゝすよ、先生』

『變ですわね。S驛前のデパートで、慥か――』

夫人が云ひかけた時に志賀君は思ひ當つた。

『あ、あの時のお嬢さんですか。それぢや、もつと落着いて見て置くんだつた』

學校の先生はこの通り云ふ事が正直だから人に笑はれる。

『ハ、ゝ。家内が佐久間さんの奥さんと學校友達でね。二人とも同窓會の幹事なんだ。會の時や何か、君の話が出て、仲人協定が出來たんださうだ』

博士は、成功の見透が付いたと見えて、内情を打ち開けた。

『横山アヤ子さんと云つて、商工省の技師のお嬢さんですわ』

さう云ひながら、夫人はツツとベルを押した。ドアが開いてアヤ子嬢が現れた。志賀君は發條仕掛の樣に起ち上つた。

眞赤になつた二人の顏を見やりながら、博士夫妻は安心の微笑を交した。

五

『祝女性會館開場』と書かれた華かなアーチを見上げて、北澤君と志賀君はニヤリとした。

二人ともキチンとした身裝で、最早や、白隱獨妙禪師やピタゴラス禁慾居士の面影はない。無理もない。志賀君は目出度くアヤ子さんと結婚したし、北澤君も國元から奥さんが來て、身の周

り萬端の世話をする人が出來たのだ。志賀君は結婚してから間もなく、上田博士の世話で或る高等學校の助教授になつた。弟に似た奥さんが出來た以上、中學に頑張る必要もなくなつたのだ。北澤君も、佐久間氏の説得に從つて工場の技師になつた。これには、奥さんが搦め手から攻め立てたことも想像される。

『中々贅澤なものだね』

會場を見廻して志賀君が感心した。銀座の某ビルデングの三階、新しく出來た女性會館である。明日から文字通り禁男の家となるので、今日一日を限り、男に參觀して貰ふのださうだ。二人とも佐久間夫人の紹介で招待されたのだ。

『彼處にチョコレートとお茶が出てゐる。憩まう』

北澤君は安樂椅子に腰を下しながら『道がは銀座だね。居心地がいゝ』

『はゝゝ。「銀座は怖い」と云つたのは誰だつたけな』

志賀君は、これも居心地よさゝうに笑つた。

『あ、さう云へば僕、君に解いて貰ひたい問題があるんだがね』

『問題？　數學の問題なら、學校へ來て貰ひたいな』

あれほど學問に熱心だつた志賀君、今は甚だ氣乘薄である。

『數學の問題ぢやないよ。結婚の問題だ』

『え、結婚の問題？』

『さう卓子を押すなよ。お茶が零れる。いやネ、國から女房が來たら僕の耳が少し鈍くなつたんだよ。レコードをかけても、タクトの音も聽えないしオートバイの雜音も聽えんのだ』

『そ、それは僕も同じだ。アヤ、アヤ子と結婚したらね、グレーテングが拙くなつちまつたよ。アヤ子はね、そんなことは何うでもいゝつて云ふんだけど、何しろアヤ子は君――』

志賀君、さかんにアヤ子を連發する。

『工場の技師の仕事には、却つて耳が鈍い位がいゝんだけどね。僕が餘り難かしい註文を出さなくなつたんで、皆は喜んでゐるらしいんだけど、しかしあんなに鋭かつた聽覺が失はれたかと思ふと、ちよつと寂しいんだ』

『僕もね、時々さう思ふよ』

『一體結婚つて、いゝものかしら、惡いものかしら』

『そりや、いゝことは定つてる。しかし寂しいことも事實だ。こゝは難問だね』

『まるで、例のハンドバッグの女の問題みたいだ』

北澤君は笑つた。

『しかし、あの時は、問題が解けないで不愉快だつたけど、この結婚の問題は、考へてるだけでも何となく愉しいぢやないか。考へてると、アヤ子の顔が浮かんで來る。僕は、何時までもこの問題が解けない方がいゝ樣な氣がするぜ』

ピタゴラス先生、まるで中學の劣等生みたいなことを云ひ出した。

其時場内の據聲機が、丸味のある甘い女の聲を送つて來た。

『お客樣に申し上げます。御婦人に限り、二階の美容室を御參觀下さいませ』

繰り返しアナウンスされた。

『御婦人に限りといふのは、今日限りの言葉だね』

『明日から、男は來なくなるからな。恐らく、今日が一番華かな日だらう』

二人は愉快さうに笑つたが、志賀君は不圖、何時かの佐久間夫人の言葉を思ひ出した。

『かういふことは、女に限りますわ――』

あの時は、教師の威嚴を害された樣で不愉快だつたが、今日の「御婦人に限り」は些とも不愉快ぢやなかつた。

『君、結婚の問題はね、御婦人に限るよ。歸つてアヤ子に訊いて見よう』

志賀君が云つた。

『あ、それがいゝ。僕も女房に教へを受ける』

北澤君は立ち上つた。もう里心がついたと見える。北澤君御自慢の耳はダラリと下がり、志賀君の魔力ある眼はドロンと霞んでゐた。

想へば久米の仙人から飛行力を奪つたのも、女であつた。どうやら、男子を俗化させるのも御婦人に限るらしい。

ドンナ・コンナ物語

一

ドンナ・コンナ物語は、桃太郎君の誕生から始まる。

桃太郎君は、葱山桃助さんの長男である。葱山さんは結婚してから三年目に、型の如く、子供が生れたので、御自分の名の桃の字をとつて、桃太郎とつけたのである。

『貴方、この子はどんな子になるでせうね』

奥さんは、産後間もなく、夢見るやうな目を輝かせていつた。はじめての子である。若いお母さんが我が子の將來をいろ〳〵と胸に描くのも無理はない。

『どんな子ツて、お前、こんな子さ』

葱山さんは、平然と答へたものである。これには奥さんも呆れた。

『貴方も張合ひのない方ねえ』

『どうして？』

『だつて、ドンナ子になるでせうかつていふのに、コンナ子さといふ御挨拶はないでせう』

といふのがドンナ・コンナの始まりで、そんなこんなで、それ以來葱山君は、スツカリ奥さん

の信用をなくしてしまつた。

だがこの場合は、何しろ問題が、目に入れても痛くない子供のことであつたゞけに、特別に強い印象になつて殘つてゐるのであるが、その後も、注意してゐると、この御夫婦の間には、よくこのドンナ・コンナが取り交されてゐるのだ。

『ねえ貴方、あたし達がうんとお金持になつて、高臺の閑靜な處に地所を買つて、素晴らしい洋館を建てたら、ドンナにいゝでせうねえ』

『なアに、家を建てたつて、借家だつて、どうせ世の中つて、コンナもんさ』

と、ざつとコンナ調子である。奥さんが葱山さんのことを張合ひなく思ふのも無理はない。

『だつて貴方、桃太郎も大きくなりますし、お金がなくつちや困りますわよ』

『お金〳〵つて云ふが、金持だつて、さう樂なもんぢやないぜ』

『あら、どうして、お金持はいゝと思ふわ、あたし』

『どうして〳〵。平價切り下げといふやつがある』

『平價切り下げつて、ドンナこと？』

『知らないのか。これは驚いた。お前は無學だね』

『あんなこといつて。貴方だつて、この間お壽司屋へ行つて、山葵を抜いてくれといふのを、胡

椒を拔いてくれなんていつた癖に』

『あゝあれか。あの時、壽司屋の奴、吃驚して腰を拔かしたね』

『そんな駄洒落はよして、早く平値切り下げといふのを敎へて下さいな。何だかあたし、心配になつて來たわ』

『何だ、金持でもない癖に。つまり何だよ、金の値打が下つて、一圓持つてゐても五十錢にしか使へなくなることさ』

『まア、恐いわねえ。何時からさうなるの』

『何時からつて、これは外國の話だ。外國のことなら僕は何でも知つとる』

葱山さんは威張つた。葱山さんは外人經營の機械商會に勤めてゐるのである。平値切り下げくらゐ、何も外人の會社に勤めてゐなくとも分ることなのだが、葱山さんはそれが病で、何かといふと、話を外國や外人へ持つて行きたがる。

何時かも、田舍の兄さんが上京した時に、

『桃助は小さい時は面白い子でね、繪本を買つてやると、子供の繪のあるところは默つて眺めてゐるが、大人の女の繪が書いてあると、はづかしい〳〵と云つて見てゐるんだよ。いやに早熟た子だと思つたら、何のこつた、むづかしいとはづかしいを間違へてゐたのさ』と云はれて大笑ひ

になつたことがあつたが、その時だつて、『でも兄さん、それは僕が子供の時でせう。むづかしいといふのをはづかしいといつたつて、別にはづかしいことはないですよ』と、子供の時分より大分厚くなつた面の皮を撫でながら、『外人なんか、大人の癖に飛んでもない間違ひをしますからね。うちの社にゐる外人で、電車に乘つて、二本榎で殺して下さいといつて車掌の膽をつぶさした奴がゐますよ。殺して下さいと下ろして下さいとでは大分違ひますからね。何しろ、人命に關する問題ですからね。僕はそんな間違ひはせんです』などゝ、自慢にもならぬことにも、外人を持ち出す。

『あら、それぢや平價切り下げつて外國の話なの。それであたし、安心したわ』

『まだ安心するのは早い。何時日本へやつて來るか分らん、抑々、國際間の經濟……』

また十八番が始りさうだつた。

『そんなこといつたら、切りがないわよ。だから、さうならない今の中に、うんとお金を儲けて自動車でも買つて、方々ドライブしたいわ。そしたら、桃太郎がドンナに喜ぶでせうねえ』

桃太郎君は、この時は小學校の一年生になつてゐた。

『お前は何時まで經つても、夢みたいなことばかりいつてる女だなア。もうコンナ話はよさう。もつと不景氣な話をしようよ』

桃助さんは、よく〳〵景氣のいゝ話は嫌ひだと見える。

二

『お母さん。甲ノ上だよ。甲ノ上だよ』

桃太郎君が玄關から呶鳴りながら歸つて來た。桃太郎君が甲ノ上をとつて來るなんて珍らしい。

『まア、景氣がいゝわね』

お母さんはニコ〳〵顏で迎へた。このドンナ夫人、景氣のいゝことが何よりお好きである。

『僕の圖畫、甲ノ上だよ、お母さん』

桃太郎君はまだ息を弾ませてゐる。

『あら、さう。見せて頂戴』

お母さんは、桃太郎君からクレヨン畫を受取つて一目見るや、

『オヤ〳〵。これ誰のお顏？』

『そこに書いてあるぢやないの？』

『ボクノオカアサン――？　まア驚いた。これ、お母さんのお顏なの』

『さう。うまいだらう』

桃太郎君、得意である。

『ひどいわ。お母さん、もつと綺麗よ。お口だつて、もつと小さいし、鼻だつて、もつと高いわよ』

『でも、金原君だつて小林君だつて、もつと汚いお母さんを描いてたよ。僕のが一番綺麗なんだよ』

『本當？』

『本當さ。だつて甲ノ上だもの』

『さうね。さういへばさうだわ。あなたお利巧になつたわねえ。お父さんがお歸りになつたら、これ見せて上げて御覽。きつと何か御褒美を下さるわよ』

お母さん、大した御機嫌である。誰のお母さんより綺麗だといふのが利いたらしい。

『嬉しいなア。僕、何を買つて貰はうかしら。皮の靴が欲しいんだけど』

桃太郎君は、ズツクの運動靴しか持つてゐないのである。

こちらは知らぬが佛の葱山さん。夕方になつて、相變らず不景氣な顏をして歸つて來た。

『お父さん。御褒美に皮の靴を買つて頂戴』

桃太郎君は圖畫のことなんか忘れて、皮の靴で頭が一杯だつた。

『ど、どうしたんだい』

お父さんは目を白黑にした。

『桃太郎さん駄目よ。圖畫を見せて上げなくつちや』

お母さんも實は、桃太郎君以上に葱山さんの歸りを待つてゐたのだ。

『あゝさうだ』

桃太郎君は早速飛んで行つて、甲ノ上のやつゝを持つて來た。

『貴方、それ、あたしに似てゐます？』

『何だ。ボクノオカアサン？　ちつとも似てやしないよ』

『さうでせう。ホラ、お父さんもあゝ仰有るでせう。實物はもつと綺麗よ。でも貴方、誰方のお母さんよりもあたしが綺麗ですつて』

葱山の奥さんは、これが云ひたかつたのである。

『フン。實物はコンナに優しい顏ぢやないよ』

葱山さんは一言で片付けた。

『だつて貴方、甲ノ上ですわよ』

奥さんは勃氣になつた。

『それはお前、繪の描き方が巧いからさ。この繪だけを見れば、なかなか優しい顏だ』

『さうだねえ、お父さん。僕の繪が巧いからだね』

桃太郎君は、何しろ皮の靴を買つて呉れるのはお父さんだと思ふものだから、お父さんを應援した。

『お默り。子供の癖に、生意氣なことをいふもんぢやないわよ。お母さんのいふことに間違ひはないわよ』

お母さんは桃太郎君を睨めつけた。

『嘘だい。お父さんの方が本當だい』

桃太郎君、こゝが大事とばかり、お父さんの肩を持つた。

『いゝわよ。そんな分らず家には、何も御褒美を買つて頂いてやらないから』

先刻はお利巧だと云つて賞めたお母さんが、變れば變るものである。これでは、どちらが分らず家だか分らない。

『うん。それはいゝ考へだ。御褒美のことは取消しにしよう』

意外にもお父さんは、お母さんに合流した、納まらないのは桃太郎君である。

『ずるいや〳〵』

と泣き出した。

『たんとお泣き。ドンナに泣いたつて、お母さん、もう構つてやらないから』

お母さんは、まだ怒つてゐる。

桃太郎君は、口惜しいやら悲しいやらで、お母さんの繪を引き破かうとした。でも、甲ノ上はやつぱり惜しいので、もう一度それを見ると、自分が描いたクレヨン畫のお母さんが、こちらを見てニコ〳〵優しく笑つてゐた。それを見たら、餘計悲しくなつて、新しい涙がボロ〳〵と流れて來た。

三

その晩のお菜は、桃太郎君の大好きな里芋のお煮物だつた。桃太郎君はすつかり機嫌を直してゐた。

『ねえ、お母さん。僕達、學藝會で兒童劇をやるんだよ』

『あら、さう。ドンナものをやるの』

お母さんも、かういふことは好きである。

『桃太郎の兒童劇だつて』

『ナニ、桃太郎？　それぢや、お前が桃太郎をやるんだらうね』

葱山さんが珍らしく目を輝かして聞いた。

『うゝん。僕、青鬼だつて』

桃太郎君は、ちよつと憎氣た。

『だつて、あなたの名が桃太郎ぢやないの』

お母さんが抗議を申し込んだ。

『うん。だから僕、先生にさう云つたの。そしたら、君は名前は桃太郎だけど、桃太郎みたいに元氣ぢやないから駄目だといはれたの』

『貴方』

とお母さんは葱山さんの方を向いて、

『だからあたし、この子に桃太郎なんて付けるの反對だつたんですよ。ドンナに名前がよくつたつて、本人が必ず偉くなるとは限らないことよ。講談に出てくる乞食には、越前守とか備中守と

かいふのがあるんぢやありませんか』

『何も乞食の例に出さんでもいゝよ』

『貴方は不景氣な話がお好きの筈ぢやありませんか。桃太郎が青鬼になるなんて、情ないわ』

『高が兒童劇の青鬼ぢやないか』

『いゝえ。ドンナにちひさいことでも、子供のことは大問題です。貴方は、元來、不眞面目です よ。子供に桃太郎なんて、巫山戯た名前をつけて――』

今晩はお母さんの鋭鋒なか〳〵侮り難い。先刻の甲ノ上の肖像畫にケチをつけられた遺恨と見 える。

『桃太郎なんていゝ名前ぢやないか。僕の桃助よりかいゝよ。僕なんか、小ない時は雲助々々と 云はれたものだ』

『貴方なんか何うでもいゝんですけど、桃太郎が可哀相ですわよ。折角名前が桃太郎なのに、鬼 ケ島退治にも行けないで』

『なアに、鬼ケ島は日本の話にだけあるもんぢやないさ。外國の話にもある』

『本當、お父さん？』

桃太郎君は、うま〳〵とお父さんの十八番に引つかゝつた。

『あるさ。ホラ、寶島つて話があるだらう。あれさ』

『知つてる〳〵。ジムつて子が出て來るんでせう』

桃太郎君は、この間お母さんと一緒に寶島の映畫を見て來たばかりである。

『三本マストの帆前船に乘つて、地圖を頼りに寶島へ行くのねえ。よかつたわねえ。とう〳〵寶 のありかが分つて、金貨がザク〳〵と、まるでビスケットみたいに出て來たわ。あんなに金貨が あつたら、ドンナに嬉しいでせうね』

お母さんは、景氣のいゝ話が出たので機嫌がよくなつた。現金なお母さんである。

『どうせお父さんは張合ひのない方だから、せめて、うちの桃太郎でも寶島を探し出してくれた ら本當にいゝんだけどねえ』

『だつて、寶島の地圖がないんだもの。あつたら、僕だつて探してあげるよ』

桃太郎君は、ジヤツキー・クーパーの扮したジムのやうに、可愛いゝ顏をして力んだ。

四

あれから幾日か經つた夜である。桃太郎君はもう寢てしまつた。葱山さんは月末で忙しいと見

えて、まだ歸つて來ない。

奥さんは縫物をしてゐたが、氣がついて、その邊に散らばつてゐた學校の本を、ランドセルの中に納つてやらうとした。

『あら、こんなものがあるわ』

奥さんはランドセルの中から一枚の紙を取り出した。それは桃太郎君が書いた綴り方だつた。乙ノ上がついてゐる。いゝ點ではないので恥しがつてお母さんに見せなかつたものらしい。

奥さんは、それを讀んでゐたが、讀み終つてから暫く考へこんでしまつた。そして、その乙ノ上の綴り方を丁寧に疊んで、大事さうに帶の間にしまつた。それは丁度、寶島のジムのお母さんがビリーの行李から地圖を取り出した時の有樣に似てゐた。

やがて葱山さんが歸つて來た。

『お歸んなさい、お疲れでせう』

奥さんは、立つて迎へた。

『今日はどうも數居が高いよ』

葱山さんは元氣なく坐つた。

『あら、どうして？』

『今日決算をやつたんだがねえ、實は今月も成績がよくないんだよ』

葱山さんの勤めてゐる會社は、本社が機械類の販賣を各支店に委任して、その成績に應じて社員に報酬を出すといふ組織になつてゐる。其處で扱つてゐる機械の利潤は相當大きいから、成績さへよければ隨分割のいゝ商賣であるが、成績が惡かつた日には日も當てられない。

葱山さんは支店長ではないが、販賣の實際の仕事を委せられてゐるのは葱山さんなのである。だから、葱山さんの腕次第で賣上げが定まるのだ。ところが、何しろ景氣のいゝことは嫌ひな葱山さんだから、賣上げ高が大きくなる筈はない。それどころか、最近は月々惡くなる一方なのだ。今夜の腐り方を見ると、今月は先月よりもつと惡いに違ひない。

『コンナ不景氣な時勢ですもの、仕方がありませんわ』

意外な奥さんの返事だつた。

『コンナ――ッ』

葱山さんは鸚鵡返しに尋ねて、變な顏をした。

『そのうち貴方にもいゝ時節が來ますわよ、屹度』

どうも今夜は風の吹き方が何時もと違つてゐる。

『僕みたいな享主を持つて、お前も氣の毒だ』

葱山さんも、つい殊勝な音をはいた。

『いゝえ。コンナいゝ良人は何處にもありませんわ』

『コンナ――　何だか變だな。おい、僕のお株を取つちや困るよ』

葱山さんは漸と氣が付いた。

『まア、お株だつて――』

奥さんは吹き出した。

『だつてお前にそれをいはれると、僕がいはれなくなつちまうぢやないか』

『それつて、何でございますの？』

『コンナといふやつさ』

『ほゝゝ。仰有らなくともいゝですわ、コンナこと』

『弱るなア。何だか調子がつかないんだよ』

『その代り、あたしもこれから、ドンナといふことを申しませんわ』

『ドンナことがあつても？』

『厭よ、あたしのお株を取つちや』

『はゝゝ。どうも變な晩だよ』

『ドンナでは、隨分貴方を困らせましたわねえ。お金があつたら、ドンナにいゝでせうなんて』

『そりや、金があつた方がいゝよ。金がないと、自分の家の敷居も高くなる』

『だつて、平値切り下げになつたら、同じことですわ』

『あれ、僕の眞似ばかりしてるぢやないか。ドンナ心境の變化があつたか知らないけど』

『貴方こそ、あたしの眞似をしてらつしやるわよ』

『やつぱり夫婦つて爭はれないね。一方が止めれば一方に移る』

葱山さんは珍らしく愉快さうに笑ひながら、

『いや、實は僕だつて、コンナ・コンナと云ひながら生れて來たわけぢやないんだ。子供の時分に、雲助々々つて呼ばれたので、憂鬱症になつたんだね。世の中なんて、どうせ詰らないと思ひこんでしまつたんだよ』

『そこへあたしが矢鱈に責め立てるもんですから、ます〳〵憂鬱におなりになつたんでせう』

『ま、正直のところ、さうだね』

『みんなあたしの罪ねえ。御免なさいね』

奥さんは葱山さんの手をとつた。

『不思議なもんだ。やつぱり子供の目に狂ひはないねえ』

葱山さんは目を丸くした。

『何をそんなに感心してらつしやるの』

『お前の顏さ。さうやつて、しほらしくしてると、とても優しく見えるよ。桃太郎が描いたボクノオカアサンそつくりだよ』

『まア、厭だわ』

奥さんは花嫁のやうに赤くなつた。

五

葱山桃助さんは生れ變つたやうになつた。

家にゐても店へ出ても、例のコンナコンナといふ口癖は、もう噯にも出さなくなつた。その代り、

『ドンナ工夫をすれば賣上げが多くなるかなア』とか、『今月は賣上げを倍加して見せよう。そしたら、社長がドンナに喜ぶだらうね』

と、今度は旺にドンナを連發するやうになつた。

店の人たちも、はじめは面くらつたが、何しろ、狐の啼き聲のやうなコンナ〳〵よりは、ドンナ〳〵の方が大砲の音みたいで、景氣がよいものだから、店にも自然と活氣が出て來た。

そして機械がドン〳〵賣れて行つた。

家にゐてもさうだつた。

『僕はこれからうんと稼ぐからね。金を儲けたら、お前達にドンナもんでも買つてやる』

などと、奥さんや桃太郎君を煙に捲いた。

初めの中はうつかり、コンナと云はうとすることもあつたが、さういふ時は、奥さんの方が先手を打つて「コンナ」を云つちまうので、止むを得ず葱山さんは、景氣よくドンナと出でざるを得なかつた。

山と川との合言葉みたいで、片つ方が云はないと、どうしても此方が云つてしまふ。

さういふ調子で、以前はよくお店を休んだり、遲刻したりしたものだが、今年は葱山さん、無缺勤、無遲刻の好成績である。

その精勤の酬いは、年末になつて、三百圓の金となつて現はれた。

葱山さんの會社は外人が社長だけに、特別に精勤を奬勵してゐる。一年間無缺勤、無遲刻の者には、社員にでも小使にでも皆一樣に三百圓呉れることになつてゐるのだ。

葱山さんは今まで一度もこの三百圓を貰つたことがなかつた。ところが今年は、貰はうとしなかつたのに、自然に貰つて了つたのである。

それを一番喜んだのが奥さんだつた。

『偉いわねえ、貴方。精勤の三百圓を貰ふなんて』

『三百圓ぢや、素晴しい洋館も建てられないし、自動車も買へないぜ』

葱山さんは笑つた。

『もうそんなもの、あたし欲しかないわ。貴方の汗の結晶だと思ふと、この三百圓は百萬圓より、あたしには嬉しいのよ。貴方は今年本當に働いて下すつたわねえ。お疲れだつたでせう』

奥さんはもう涙ぐんでゐる。

『なアに、大したことないよ。たゞ愉快に働いただけさ』

『全く貴方は見違へるやうにおなりですわ』

『いや、これといふのも皆お前の所爲さ』

『あら、どうして？』

『ほら、何時か僕が月末の成績が悪くて、とても腐つて歸つて來たことがあるだらう。あの時、てつきり怒るだらうと思つたお前が、桃太郎の描いたクレヨン畫のやうに優しい顏で慰めてくれ

たので、それですつかり元氣が出たんだよ』

『まア』

『だから、お前は三百圓といふ寶島の水先案内だつたんだよ』

『いゝえ、あたしなんか――』

『いや、家庭の寶島は、紙で作つた地圖には出てゐないんだ。妻の優しい笑顏が、家庭の寶島の地圖だよ』

『貴方、それは違ひますわよ。寶島で思ひ出しましたけど、そんなら貴方にお目にかけるものがありますわ』

さう云つて奥さんは、隣の部屋から一枚の紙を持つて來た。

『これが本當の寶島の地圖よ。讀んで御覽なさいな』

『何だ、桃太郎の綴り方ちやないか。おや〳〵、乙の上だね』

葱山さんは笑ひながら讀み出した。

『ぼくのうち。ぼくのうちでは、おとうさんよりかおかあさんがえらいです。いつも、しかるのはおかあさんで、しかられるのはおとうさんです。おとうさんがコンナといふと、おかあさんがドンナといひます。だから、コンナよりドンナがえらいのでせう。ぼくは、づぐわが甲ノ上だつ

たので、ごほうびをもらいたかつたので、おとうさんにかせいしましたら、おかあさんにしかられて、ごほうびはもらへませんでした。これから、ぼくはおかあさんにかせいしようとおもひます』

『先生の評が出てますから、讀んで御覽なさい』

『おとうさんもおかあさんもみんなえらいです。おとうさんのおつしやることをよくきかなければいけません――。成る程、流石は先生だね』

『桃太郎が恥しがつて見せなかつたんですのよ。あたしがランドセルの中を見たら、出て來ましたのよ。ほら、あの晩ですよ』

『あの晩か』

二人にはまことに印象深いあの晩である。

『この綴り方を讀んで、あたししみ〴〵、改めなけりやいけないと思ひましたの』

『それで、あの晩あんなに優しかつたんだね。まるで狐につまゝれたやうだつたよ』

『あたしがコンナ〳〵と啼いたから？』

『はゝゝ。違ひない。そして乙ノ上の綴方が寶島の地圖か。面白いな』

『やつぱり桃太郎はジム少年でしたわね』

奥さんは、安らかに眠つてゐる桃太郎君の寢顏を眺めた。

『たゞの靑鬼ぢやなかつたんだね』

『そして、貴方が船長スモーレツトよ』

『さあ、僕は片脚のロング・ジオンだらう。ところでお前は？』

『あたしは貴方、ジムのお母さんぢやありませんか』

『さうか。これで役者は揃つたね』

『まだありますわ』

『誰だい』

『先生よ。綴り方の評を書いて下すつた先生よ。あの先生の爲にあたしの目が開いたんですもの』

『本當だ。先生はさしづめ、あの賢いライブジー先生と云つたところだね。だが、三百圓の寶島ぢや、ちと貧弱だね』

『いゝえ。三百圓は問題ぢやないことよ。貴方の、その元氣な頼もしい御氣性が、あたし達の寶だわ』

『さう云はれると聊か照れるが、桃太郎の奴も、靑鬼にされた時は悄氣てゐたけど、やつぱり彼

奴、寶島のジムだつたんだね』

『何しろあたしの子ですからね。ドンナもんです』

奥さんはポンと胸を叩いた。

『あはゝゝ。僕はコンナに世の中の樂しいものとは思はなかつたよ』

葱山さんは、思はず奥さんに釣られて元の口癖に逆戻りした。だが、この時のドンナとコンナは、まるで元とは中味が違つてゐた。

第二の鬼

一

麻生君と房江さんか、一通の手紙を奪ひ合ひしてゐる。

『僕に來た手紙だから、僕が最初に讀む權利がある』

『だつて、採用の通知か何うか、あたしだつて早く知りたいんですもの』

『採用に定つてるよ。今度といふ今度は大丈夫さ』

到頭麻生君が手紙を奪り上げて、封を切つた。——拜啓。昨日は御足勞を煩はし恐縮に存じます。貴下の詩人らしい純情には痛く動かされ、今も猶、荐りに貴下に心を惹かれて居りますが、職員組織上のいろ〳〵な事情から、終に他に決定することになりました。

『畜生！　こんな筈ぢやなかつたんだがな。人を馬鹿にしてやがる』

麻生君は手紙を投げ出して、ドスンと寢轉んだ。このところ糠喜びが重つてるのだから、麻生君が腐るのも無理はない。

麻生君が丸ノ内の映畫輸入會社を罷めてから、もう半年になる。生來呑氣な彼は、その中何うにかなるだらうとオツトリ構へてゐたのだが、何うにかなるどころか、物價は高くなるし退職金

は費ひ果してしまふし、明日の米代も危くなつたので、それで急に慌てゝ就職運動を始めたのだ。

心當りの會社は云ふに及ばず、保險の外交員から壽司屋の宣傳部員に至るまで、手當り次第に運動したのだが、皆駄目で、昨日は或る私立中學の校長に會つて來たのだ。英語の教師の缺員があるといふので、大學を出る時英語教師の免狀を取つて置いたのを幸ひ、人の紹介でその校長と會つたのだが、話は思つたより好調で、麻生君、地獄で佛に會つた樣な心地で歸つて來たのだつた。今の手紙は、その校長から來たのだ。

『昨夜は大變な氣焰だつたけど、詩人の純情だけぢや、御飯は食べられないわね』

讀み終つた手紙が、房江さんの手でブル〳〵慄へてゐる。

『どうも變だよ。昨日會つた時は、他に候補者はないと云つてたがなア』

『あつても正直に云はないわよ。それを眞に受ける貴方の方が、餘ッ程世間知らずだわ。あたし達、明日から何うするの？　もうお金はないことよ』

房江さんは騷ぎ立てた。

『くよ〳〵するこたアないよ。何アに、渡る世間に鬼はない』

『呆れた。かういふ際に浪花節を唸る人がありますか』

『冗、冗談ぢやない。渡る世間に鬼はないといふのは、僕が無錢旅行で體驗した金言だ。浪花節だなんて、失敬な――』

麻生君はムツクリ起き上つて開き直つた。

麻生君の無錢旅行といふのは、彼が十七の夏だつたから、今から十五六年も前のことだ。中學の暑中休暇を利用して、鄉里の北陸地方を、それこそ文字通り無一文で旅行したのだが、その頃は麻生君も紅顏の美少年で、それに昔は中學生と云へば田舍では大したもので、何處の家でも快く泊めてくれた。全く、渡る世間に鬼がなかつたのだ。

『アラ。貴方はまだ、あんな子供の時分の事を考へてらつしやるの？』

無錢旅行のことは、房江さんもよく聞かされてゐるから知つてゐる。

『さうさ。あの時分が、僕の三十三年の生涯での、つまり黃金時代だもの』

『ぢや、今は何の時代？　貴方、昔を語る人は敗殘者よ』

『よし。それぢや未來を語らう。僕はね、山部さんに賴んで、映畫俳優になる積りだ。映畫俳優になつて、日本中の女から花束を貰つて見せらア』

麻生君は見得を切つた。山部氏といふのは彼の先輩で、映畫監督である。

『まア、貴方が映畫俳優に――？』

房江さんはプツと噴き出して『貴方が俳優になんかなれたら、太陽が西から昇るわよ。猫脊で近眼で縮れツ毛で――』

『なに、猫脊で近眼で――』

云はれて見ると、なるほど正にその通りである。しかし房江さんの口から恁麼言葉を聞くのは初めてだ。新婚當時は夫婦喧嘩の文句にも、もつと色ツぽい情味があつた。『貴方なんか綺麗だし、頭腦はいゝし、あたしと別れたつて、お嫁さんが澤山來るでせうねえ』これが房江さんの口癖だつた。それが今は、御亭主の弱點を洗ひ浚ひ並べたてる。麻生君たるものゝ失業の僻みも手傳つて、甚だ面白くない。初めは冗談半分だつたのが、急に顏色を變へて立ち上つた。

『苟も良人の棚下ろしをして、それでお前は氣持がいゝのか』

その科白に、ピシヤンといふ伴奏が入つた。麻生君が房江さんの頰べたを撲つたのだ。これも開闢以來の異變である。麻生君は愛妻家として有名だ。夫婦喧嘩と云つても、今までは、口喧嘩がせいぐ〳〵だつた。

『おや。毆りましたね』

房江さんも眞靑になつて起ち上つた。

『當り前だよ』

麻生君は見向きもせず、一人で洋服に着替へ始めた。

『洋服なんか着て、一體何處へいらつしやる積り？』

房江さんは麻生君を睨んだ。

『お前みたいな不愉快な奴と一緒に居たくないんだ。俺は旅行をしてくる』

『旅行ですつて？　お金もない癖に――』

『金？　ヘン、金がなくつたつて旅行は出來るさ。俺は無錢旅行の名人だ。第二の無錢旅行をやるんだい』

麻生君は啖呵を切つて玄關へ出た。房江さんは部屋から出て來なかつた。

『チエッ。見送りにも出て來やがらねえ。俺の財布に旅費なんかないのを承知して、多寡を括つてやがるんだな。よし、こんな家へは二度と歸つて來てやらねえぞ』

麻生君は憤然と門を出た。もう、夕方だつた。

一

それでも麻生君のポケットには、電車賃位はあつた。彼はそれで、先輩の山部氏を中野に訪ね

た。麻生君も、もう中學生ぢやないから、まさか本當に無錢旅行をする氣はなかつた。

『あ、お客さんですか』

麻生君は山部氏の玄關で躊躇した。三和土には、男の靴と女の派手な草履が並んでゐた。借金の訪問に、相客があつちや具合が惡い。

『構はないんだ。上り給へ』

豪猪に圓味をつけた樣な山部氏が、式臺の上から麻生君を見下ろした。

麻生君はオヤツと思つた。この時の山部氏の姿が、中學時代の無錢旅行で會つた萬巖寺の和尚にソツクリだつたのだ。麻生君は房江さんに、渡る世間に鬼はないと威張つたけど、實はあの時の旅行で、彼は只一度、鬼に會つた。それは萬巖寺の和尚だつたのだ。

寺の玄關で一泊を乞うたら、和尚が右手に食ひかけの梨を持つて出て來た。あの時の光景を麻生君は今ハツキリ思ひ出した。

『なに、中學生で無錢旅行？　いゝ心掛けぢや。少しは野宿をしたかの？　一度もしない？　目ぢやゝ。無錢旅行は野宿と、昔から定つとる。今晩は寺の境内で寢な。明日の朝飯は食べさせてやる』

さう云つて、旨さうに梨を頬張りながら奥へ引込んで行つた。仕方がないから、境内の老樹の

下に寢轉んで一夜を明かした。朝になつたら、和尙は約束の通りに朝飯を食はしてくれて、名前は忘れたが、萬巖寺開祖の偉い坊さんの修業の話などを聞かせてくれた。麻生君はあの時ほど美味い朝飯を食べたことはなかつたし、あの時ほど身に沁みてお說敎を聽いたこともなかつたが、玄關で一夜の宿を斷られた時は、全くこの『鬼め』と思つた。さう云へば、何處となく鬼の樣な顏の和尙だつた。

ところで、今まで誰かに似てる〳〵と思つて思ひ出せなかつた山部氏が、何と、萬巖寺の鬼和尙に肖てゐたのだ。先刻から無錢旅行のことを考へてゐたのと、金を借りに來たといふ僻みで、ゆくりなく、十數年前の『鬼』の印象が甦つて來たものと見える。

『君が來てくれて助かつたよ。今、新婚の御兩人に當てられて、フウフウ云つてたところさ』

座敷へ上つた麻生君へ、山部氏は苦笑しながら先客を紹介した。先客は古谷氏とその新妻だつた。

古谷氏といふのは若い百萬長者で、燃料會社の重役であるが、道樂に作曲をやつてゐるのださうだ。

『音樂をおやりになるんですか。音樂と聞いては懷しい。僕もラベル先生の弟子でしてね、到頭ラベル先生も亡くなりましたが――』

これが生れつきの性質で、麻生君は誰にでも無邪氣に話しかける。かういふ性分だから、無錢旅行も樂に出來たのだし、中學の校長に『詩人』などと思はれたのだらう。

『ほう、ぢやフランスにいらしたことがあるんですね。私も二度行きました』

古谷氏は懷しさうに麻生君の顏を見た。

『いや、レコードでラベル先生の作曲を研究したんです。海の彼方の弟子です』

麻生君は頭を掻いた。これには古谷夫妻が思はず吹き出した。

『麻生君は千手觀音だからな。映畫輸入會社に居た時だつて、ストオリーの飜譯はやるし、事務は執るし、外國通信はするし、ポスターは描くし――』

山部氏は取り做し顏に說明したが、急に話題を更へて、

『おや。奧さんの指輪は紅玉ですね。それは結婚前の女の寶石ぢやありませんか』

『だつてあたくし、婚約時代の品は懷しくつて――。この指輪は巴里で、この帶留は京都で、皆婚約時代に古谷が買つてくれたんですのよ』

古谷夫人は牡丹の樣に微笑んで、新郎を振り向いた。濃厚絢爛な匂ひが部屋中に漂ひ動いた。

可哀相なのは麻生君である。年來連れ添つた細君に愛想を盡かされて、助けを求めて飛び込んだ場所が、思ひきや、この有樣だ。もう我慢が出來なくなつた。

『あの、あの、僕、話があるんですけど――』

麻生君は吃りながら山部氏を見上げた。

『あ、さうか』

山部氏は頷いて『ぢや、古谷さんと奥さんは妾宅の方へ行つて遊んでてくれませんか。女房がゐますから』

と氣輕に立つて、新夫婦を案内して行つた。

『妾宅に女房がゐる』とは、隨分奇拔な話であるが、元來山部氏は恁ういふ人物である。世間並の定規には當て嵌らない。

山部氏の裏の家が最近明いた。『あの家に子供澤山の家族にでも入られたら、騷々しくて仕事が出來やしない』と云つて、山部氏はその家を借りて妻子を住ませ、自分は今迄の借家一軒を獨りで占領してゐるのだ。二軒借りる位なら、その家賃で、豪壯な邸宅を一軒借りたらよささうなのに、そこが山部氏の流儀で、一人で獨立家屋を占據してゐるのが嬉しいらしいのである、萬事この調子だから、酒を飲んでも旅行をしても、何時も足を出す。麻生君が千手觀音なら、山部氏は千足觀音だ。

『やア、失敬々々』

山部氏は裏の「妾宅」から戻つて來て『どうかしたのかい？』

『實は女房と喧嘩をしちやひましてね。金を拜借して旅行でもしようと思つて、家を出て來たんですけど――』

『はゝゝ。餘程やられたらしいね。旅行もいゝだらうけど、君一人で行くのは、少し險呑だな。先刻來た時、君の眼はすごく血走つてたぜ。それよか今晩は二人で、街で愉快に飲まうよ。それから、氣が向いたら、旅行へ出たらいゝぢやないか』

『えゝ、それでもいゝです。兎に角今晩は家へ歸りたくないです』

『うふゝゝ。今迄僕と一緒に飲んでも、一度も外泊したことのない愛妻家の君が、今日はよつぽど何うかしてる』

山部氏は苦笑しながら『ぢや、髭を剃つて來るぜ。街へ出るにはおめかしをしなくつちやね』

と裏の家へ立つて行つた。

三

『ねえ山部さん、僕、映畫俳優になりたいんですけど』

山部氏の家を出てから、麻生君が切り出した。

『映畫俳優？　よした方がいゝよ』

山部氏は相手にしなかつた。

『どうせ、さうでせうよ。僕は猫背で近眼で縮ッ毛ですからね』

今宵は麻生君、大分僻んでゐる。

『さういふ譯ぢやないよ。お世辭ぢやないけど、君は獨特ないゝ顏をしてる。それに千手觀音だから、俳優だつて演れるさ。しかしだよ、映畫俳優なんて、見た目ほどいゝもんぢやないぜ。僕は君を俳優にしたかないな。君も君の奥さんも、無邪氣な夫婦だから、何か堅氣な商賣の方がいいよ』

『堅氣な商賣は、もう皆、當つて見たんです』

麻生君は子供みたいに泣顏をかいた。

『ちよつと、バットを買つて來る』

山部氏は煙草屋に寄つた。

『チエッ。吸口が入つてねえや。取り換へて來てやらう』

山部氏は、買つて來たバットの函を開けて見て、舌打をした。

『だつて貴方は、何時も吸口なしで召上つてるぢやありませんか』

麻生君は笑つた。それには構はず、山部氏は煙草屋へ行つて、別のバットと取り換へて來た。

『それとこれとは別問題だよ。吸口を使はないのは僕の勝手だ。だが、バットには吸口を容れとくのが、これは天下の定法だらう。僕は、間違つたことは誰にも許さない主義なんだ』

と威張りながら、山部氏は吸口のないバットに火を點けた。

それを見た麻生君は、これは愈ゝ萬巖寺の鬼和尙だと思つた。あの和尙も玄關で『無錢旅行は野宿と、昔から定つとる』などと高言を吐いた。

『この先輩は、僕が今迄に逢つた二番目の鬼だ』

山部氏の横顏を眺めながら、麻生君は心中密かにさう思つた。

二人は銀座へ出て、山部氏御贔屓の酒場に入つた。

『今晩はウンと飲まう。僕は、とても愉快なんだ』

山部氏は一人で燥いだ。麻生君は餘り面白くなかつた。苟も後輩たる自分が職にあぶれ、剩へ家庭爭議で腐り切つてるのに、人の氣も知らないで一人で有頂天になつてゐるとは、甚だ先輩らしくないと、憤慨した。

『アラ。何がそんなに嬉しいんですの。先生』

山部氏の側に坐つた女給が訊ねた。

『お前なんかに、勿體なくて云へないことさ。何しろ、こんなに愉快なことは、僕が生れてから二度目だ』

『屹度お安くないことなのね。結婚記念日？』

『馬鹿。結婚記念日は一年に一度づつあるぢやないか。僕の長男はもう中學の四年生だぞ』

『ぢや先生のお誕生日？』

麻生君の傍の女給が口を出した。

『この店には馬鹿が揃つてるな。僕の誕生日は今年で四十何回目だ』

『何でせうね、一生に二度目の喜びつて——』

山部氏の傍の女は首を傾げてゐたが『二度目つて云へばね、先刻、酒場といふ所へ來たのは生れて二度目だといふ、珍らしい人が來たわ』

『青年だらう。當り前ぢやないか』

麻生君が云つた。

『いゝえ。それが五十年配の上品な紳士なのよ。教授らしいわ。從弟といふ人に連れられて來たの』

『五十年配で酒場へ二度目とは、世の中は隨分堅氣な人が居るもんだな』

山部氏は笑つた。

『愛妻家なのね。だからチヤンと結婚指輪を嵌めてらしたわ』

と云ひながら、麻生君の傍の女は麻生君の手を見て『アラ〳〵、此人も結婚指輪があるわよ。あたし今晩、愛妻家のお客さんをお二人見たわ。此人は二度目の愛妻家——。あたし愛妻家は苦手よ』

さう云つて、女は彼方へ行つてしまつた。麻生君はポカンとした。

『いやに二度目が流行るんだな』

山部氏はニヤ〳〵しながら『おい、今晩店が閉つたら、いゝ所へ行かうか』

と傍の女の肩を抱へた。全く、梨を見せびらかして自分だけ旨さうに食つてゐた、あの鬼和尚の二の舞ひだ。但し二番目の鬼だけあつて、萬巖寺の和尚よりは俗つぽい。さすがにあの和尚は女は見せびらかさなかつた。

『二度目が流行る筈ですよ。二番目の鬼が女を口説いてらア。アハ〳〵』

麻生君は自棄に笑つた。もう大分醉つてゐる。

それから二三軒飲み歩いた。遂がに二人とも、もう酒が入らなかつた。山部氏は圓タクを拾つ

た。先刻山部氏が女と約束してゐたから、屹度待合へでも行くのだらうと、麻生君は想像した。構はない、一緒に附いて行つて邪魔をしてやれと覺悟を定めてゐた。どうせ家へは歸らない積りだ。

しかし圓タクは、花柳街を幾つか通り越して、何時の間にか高田の馬場へさしかゝつた。

『麻生君。君の家は、此處から歩いた方が近かつたね』

山部氏が意外なことを云ひ出した。

『それぢや僕だけ、あの、家へ歸るんですか？』

麻生君は情ない顏をした。

『僕も歸るよ。もう直ぐ中野だ』

『でも貴方は、女給と約束があるんでせう』

『ハヽヽ。女給なんか詰らないよ。妾宅へ歸つて女房の顏を見た方が餘ッ程いゝ。君、家の女房は親切で愛嬌があつて、いゝ女房だぞ』

山部氏はニヤリとした。麻生君はムカ〳〵と腹が立つて來た。

『どうだ、やつぱり旅行へ行くかい？　行くなら金を出しとくぜ。僕には樂しい我が家があるけど、君は可哀相だから——』

山部氏は、さも憫れむ樣に麻生君の顏を覗き込んだ。麻生君は、意地でも金を借りたくなくなつた。

『旅行は止します。僕だつて我が家はあるんです。これでも、家へ歸れば亭主關白です』

麻生君は自動車を降りてしまつた。

『ぢや、お休み。いゝ夢を見給へ』

山部氏は笑ひながら窓で手を振つた。麻生君は、揶揄はれた樣な氣がした。

『ヘン。洒落たことを云ふねえ。女房に甘い鬼なんて、だらしがねえぞ』

麻生君はブツ〳〵云ひながら歩き出した。どうも足許が危い。

四

『夜道をトボ〳〵歩いてると、どうも無錢旅行を思ひ出す。渡る世間に鬼が——ゐた。歸る我が家にも鬼がゐる』

生醉ひ本性遠はず、麻生君は曾ての無錢旅行の金言を修正しながら歩いてゐた。全く、女房が鬼に見える時刻だ。彼氏の胸中、察するに餘りがある。

『わア、出たア』

我が家の玄關を開けたトタンに、麻生君は膽をつぶした。青ざめた顏をした房江さんが、メツと立つてゐたのだ。いよ〳〵三番目の鬼出現である。

『助けてくれエ』

麻生君はドン〳〵二階へ驅け上つた。

『貴方ツ』

房江さんが追かけて來た。

『濟まん、濟まん。遲くなつて慙愧に堪へん。心配したらう』

麻生君はペコ〳〵お辭儀をした。大變な亭主關白である。

『貴方、第二の無錢旅行は如何でした？』

房江さんはニツコリした。かういふ時の笑顏は却つて氣味が惡い。麻生君はゾツとした。

『七時頃だつたかしら、かういふ方がいらしたわ』

房江さんは名刺を出した。見ると古谷健作とある。麻生君は、何だか憶えのある名前だと思つた。

『山部さんのお宅でお會ひになつたんですつてね』

云はれて氣が付いた。さうだ、あの百萬長者の重役だ。

『だが、どうして古谷氏が僕の家へ――？』

麻生君は、彼の訪問の理由が分らなかつた。

『それが貴方、古谷さんの義兄の方が理化學研究所の技師で、「白晝映寫幕」といふのを今度完成なすつたんですつて。明るい所でも映畫が寫せるスクーリンですつてね。それに古谷さんが出資をなすつて、製作會社が出來るんださうですけど、その創立事務所に人が要るんで、それで貴方を招聘にいらしたのよ』

『え、ぼ、僕を？』

麻生君は寢耳に水だつた。

『えゝ。貴方のことをよく知つてらしたわ。「御主人は千手觀音ださうですから、創立事務所には最も適任だと思ひます」ですつて。ホホ、』

『有難い』

麻生君は思はず雀躍した。

『嬉しいわねえ。それに貴方、奧さんも御一緒だつたのよ。綺麗な明るい奧さんでしたわ。餘りお話がお上手なので、あたしスツカリお友達になつたの。今度の日曜に、晩餐に招待して頂いた

わ』

房江さんは少女の様に眼を輝かせた。

『しかし、をかしいなア。社員を雇ふのに夫婦連れで來るなんて――』

『御夫婦連れと云へば、さうさう、山部さんから頼まれたと云つて、貴方に、手紙と洋酒を持つて來て下すつたわ』

房江さんは次の間から、手紙とブランデーの瓶を持つて來た。

『何だ。飲みかけの瓶ぢやないか。半分しか入つてないや。馬鹿にしてやがる。手紙は讀んだかい』

『いゝえ。だつて親展と書いてあるんですもの』

『許すから、お前讀めよ。俺は讀みたかねえ』

『あたし恐いわ。今日の中學校長の手紙で懲りたわ』

先刻は校長の手紙を奪ひ合ひした二人が、今は讓り合つてゐる。

『鬼の奴、どんなことを書いて寄來しやがつたらう』

麻生君はブツ〳〵云ひながら封を切つた。讀んでゐる中に、麻生君の手はブル〳〵慄へた。先刻の校長の手紙も房江さんの手の中で慄へたつけ。

『どんなことが書いてあつて？』

房江さんが心配さうに覗き込んだ。麻生君は黙つて、彼女に手紙を渡した。

『――御就職お目出度う。僕はこんなに嬉しいことはない。古谷氏は信頼の出來る紳士だ。決して悪い様には計らはないと信じる。この酒はフエネシーのブランデーで、飲みかけで失禮だけど僕にとつては因縁のある酒だからお贈りする。僕も一年餘失業してゐたことがあつた。隨分苦しかつたが、今の會社に拾はれた時は嬉しかつた。その時、女房が買つて來てくれたのはこの酒だつた。僕達夫婦はこの酒を「黄金の酒」と名付けて、愉快な時に飲むことにしてゐた。君も奥さんと二人で飲んでくれ給へ。僕の、さゝやかな友情の證として――』

房江さんは讀んでゐる中に、涙で、手紙の文字が霞んで來た。

『まア、黄金の酒ですつて――。貴方、中學時代の無錢旅行のことを、黄金時代だと仰有つたわねえ』

『うん』

『今晩は第二の無錢旅行だと仰有つたでせう。あたし達、これから第二の黄金時代ですわね』

『みんな、山部さんのお蔭だ』

麻生君の聲は顫へた。彼は酒場で、山部氏が『生れて二度目に嬉しい晩だ』と云つてゐたのを

思ひ出した。あの人は、僕達夫婦の喜びを自分の喜びとして喜んでくれたのだ。就職のことだつて、山部さんが古谷氏に奬めたのに違ひない。さう云へば、髭を剃りにあの人が『妾宅』へ行つた時間が、少し長過ぎた樣に思へた。さつきまで憎い〳〵と思つてゐただけに、麻生君は涙が出るほど嬉しかつた。

『さア、二人で有難い友情の酒を頂かう。そしたら、お前の顏も薇薔色になるだらう』

麻生君は自分で立つて行つて、二つの杯を持つて來た。

『あたしの顏、そんなに靑い？　眠るに眠れないし、玄關でお待ちしてゐたもんですから――』

『はゝゝ。僕は靑鬼かと思つて吃驚した』

『アラ、酷いわ。鬼なんて――』

房江さんは優しい眼で睨んだ。

『いや、鬼にも色々あるよ。西洋の天使には、ガブリエルを首に九ツの階級があつて、愛の天使とか、力の天使とか、德の天使とかあるさうだが、お前は三番目の鬼だから、まア、美の鬼かな』

『三番目？』

『一番目の鬼は萬巖寺の和尙だよ。あれは善智識の鬼だ。二番目は山部さんさ。あの人は友情の

鬼だね』

ここで二人は、杯を打ち合せて酒を飲んだ。

『どうだい、醉ひ心地は――？』

麻生君は笑つて訊ねた。

『あたし、何だか胸が迫つて――。愉しい樣な、泣きたい樣な――。お酒に醉ふつて、こんな氣持なの？』

『一口位でそんなに醉ひやしないよ。お前が醉つたのは、酒ぢやなくて、山部さんの友情なんだ。酒の醉ひは直ぐ醒めるけど、友情の醉ひは、死ぬまで醒めない』

さう云ふ麻生君の眼にも、涙が一杯溜つてゐた。

馬鹿だるま

一

民家の庭先だつた。

内地の椽臺に似た細長い卓に向つて、長坂上等兵がしきりにペンを走らせてゐる。卽に六七枚便箋がめくられてあつた。體の恰好から見ても、執筆の熱心さから見ても、ちよつと火野葦平軍曹といつた感じだ。

『おい、達麿。また書いてるのか』

井戸の方からやつて來た小早川伍長が聲をかけた。

『ハツ』

長坂上等兵は顏を擧げた。擧げた顏を見ると、なるほど達麿である。彼のまん圓な眼には「麥と兵隊」の詩情はなくて、面壁三年の念力があつた。

『あんまり長い手紙を書くと、中隊長殿が、檢閲の時にお困りになるぞ』

小早川伍長は卓の向側に腰を下ろした。

『は、後四五枚であります』

達麿上等兵は、やつとペンを擱いた。

『中隊長殿がね、「光ちやんの手紙」は檢閲なしにしようかなアと云つとられたぜ』

小早川伍長は笑つた。

「光ちやんの手紙」といふのは、光ちやんから來る手紙といふのではない。光ちやんへ出す手紙なのだ。今、達麿上等兵が書いてるのが、卽ちそれで、隊では誰知らぬ者がない。光ちやんからとか、光ちやんへとか、そんなてにをはなんか何うでもいゝほど、有名になつてゐるのだ。

『えツ？　そ、それは本當でありますか。そんなら自分はもう十枚程書く決心であります』

達麿上等兵は少年の樣に目を輝かした。

『冗談だよ。檢閲は檢閲――軍紀は嚴重だ』

小早川伍長は惶てゝ手を振つて『お前は直ぐ冗談を眞に受けるから困る。だから、馬鹿だるまつて云はれるんだ。お前が餘り濃厚な手紙を書くんで、中隊長殿が冗談を云はれたんだよ』

『分隊長殿、冗談でも、嬉しいのであります。中隊長殿が、光ちやんの手紙に、そんなに理解して下さると思ふと、自分は本望であります』

達麿上等兵の目の輝きは、いさゝかも曇らなかつた。

『理解だつて？　驚いた。お前の、その長つたらしいお惚けの手紙を讀むのは、中隊長殿だつて

正直なとこ、うんざりなさるんぢやないか。それを、理解だなんて、ハ、、、達磨はお手出度いなア。やつぱり「死なにや療らねえ」組だね』

小早川分隊長に帯革をゆすぶりながら立ち上つた。

死なにや云々は、この中隊の隠語で、云はずと知れた馬鹿の同義語だ。虎造の浪曲がその語源だが、その日その日死を賭けて戦ふ陣中にあつては、この言葉は、想像以上に兵隊達の胸にこたへる。

『分隊長殿。それを云はんで下さい』

馬鹿だるまと云はれた時には動じなかつた長坂上等兵も、さすがに顔を赤くして頭を掻いた。

それから一時間後、二人は揚柳の河畔を歩いてゐた。石佛で有名な北支のD――である。彼等の隊は、今、この街を警備してゐるのだ。

あの手紙を書き上げた後なので、達磨上等兵はいかにものんびりした顔をしてゐた。

『分隊長殿、麥が太分伸びましたね』

『うん。故郷で麥踏みをした頃を思ひ出すな』

二人は麥畠の方へ足を向けた。

達磨上等兵は二十七歳の獨身で、内地では村役場の書記をしてゐた。それが、出征してから、慰問文のやりとりで、光ちやんなる女性と親しくなつたのだ。

慰問袋や慰問文では、娘だと思つた女名前が、七十のお婆さんだつたりすることは珍らしくなかつたが、尠くとも光ちやんの場合は、年齢閲歴素性がハツキリしてゐた。

三十四の老處女で、幼稚園の先生で、これ迄の許婚者と戀人が二度まで死んで、それで今尚獨身でゐるといふことまで判明してゐるのだ。しかもその手紙は流麗典雅、豊かな情操と愛情が溢れてゐた。ただ殘念なことは、達磨上等兵の再三の頼みにも拘らず、まだ寫眞を送つて來ないことだつた。

『分隊長殿。自分は何うして戦死しないで此處まで來たんでありませうか』

麥畠の間の小徑にさしかゝつた時、達磨上等兵は立ち止つた。

『お前の武運が強いからさ』

小早川伍長は振り返つて微笑んだ。『これから何うなるかは、分らんがねえ』

全く達磨上等兵の武運は強かつた。決死隊と云へば、彼は眞先に志願した。激烈な戦闘は何回となく繰り返へされた。それでも彼は生き殘つてゐるのだ。

『しかし分隊長殿、今度戦闘があれば、自分は戦死するんであります』

馬鹿だまる

達磨上等兵は、また歩き出した。

『はゝゝ。そんなことが分るもんか』

小早川伍長は今度は振り向かなかつた。

『いえ、光ちやんの手紙にありました。「あたしと約束した男は皆、死にますから——つて』

『おい達磨。お前はそんな、やくたいもないことを——』

分隊長はお國言葉を出して呶鳴つた。『そんなことを信じるなんて、お前の馬鹿は、全く死ないにや療らないな』

『は、今度戰死すれば、自分の馬鹿も療ります』

無邪氣に笑つた上等兵の眼に、芽の伸びかけた麥が、青々と映つた。

一粒の麥地に墜ちて死なずば唯一つにてあらん。死なば多くの實を結ぶべし——。

この文句が彼の頭の中に浮んだ。これは、光ちやんの手紙の中に書いてあつたのだ。聖書の中の文句ださうだ。

——多くの實を結ぶべし

達磨上等兵は、頭の中で、も一度この言葉を繰り返した。眼には麥畠が映つてゐたが、その麥畠のやうに青々とした明るいものが、彼の頭にも映つた。佛教の涅槃といふのは、こんなものか

と、彼は不圖思つた。

二

縣廳所在地の〇〇驛は、歸還兵を迎へるので色めき立つてゐた。

白布の標章をつけた婦人團員は甲斐々々しく立ち働いてゐた。その中に、「光ちやんの手紙」の御當人、副島光子さんも混つてゐた。今日の歸還兵の中に、達磨上等兵がゐるのだ。

彼女は、嬉しいと云ふより、何だか恐しかつた。他の出迎人達は、皆再會であるが、彼女は、彼と初めて會ふのだ。

お互ひに顏を知らなかつたが、豫て打ち合せてゐたので、達磨上等兵と光子さんは、驛前の天幕で逢ふことが出來た。

馬鹿だまる

『貴女が、あの——』

『貴女が、あのウ——』

二人が最初に交はした言葉はこれだつた。手紙では、あれほど書き並べたお互ひの名前を、面と向つては、どちらも云へなかつたのだ。

『貴女はもつとお婆ちやんかと思つた。こんなに若くて美しいとは思はなかつた』

達磨上等兵は獨り言の樣に呟いた。

彼女は最後まで寫眞を送つてくれなかつたので、定めし不美人だと想像してゐたのだ。

『幼稚園の子供と毎日暮してゐるんですもの――』

光子さんは、ホンノリ紅くなつた耳朶を見せて俯向いた。

『こんなに美しい癖に、どうして寫眞を送つて下さらなかつたんです？』

『でも、もし戰死なすつた時に、女の寫眞などが殘りますと――』

光子さんは、大和撫子らしい心遣ひを、初めて發表した。

『戰死と云へば、到頭貴女の豫言は當りませんでしたね。自分は、生きて歸還するとは思はなかつたですが――』

『濟みません』

光子さんは謝つた。妙な謝罪だ。

『いや、貴女のお蔭で、自分も何うやら戰功を樹てました。自分は、根が文學青年で、本當は弱蟲だつたんです。それが貴女の手紙のお蔭で、死ぬのが何でもなくなりました。死ぬのが惜しくさへ――』

『あ、それを仰有らないで――』

光子さんは手を振つて『貴方に差し上げようと思つて、これを持つて參りました』

と、袱紗から張り子の達磨を取り出した。

何とも奇妙な代物である。玩具の達磨に、縫ひぐるみの足が七本ついてゐる。

『そ、それは一體何です？』

上等兵は目をパチクリさした。

『あたしの田舍で、何かいゝことがあると、達磨さんに眼玉をつける習慣があるんですの。目のない達磨さんを買つて來て、いゝことのあつた度毎に、一つづゝ眼を差し上げるんですけど、眼玉は三つ以上になりますと、お化けになりますから、困りますわ。布袋樣なら、座敷團を何枚も差し上げられますから、布袋樣にしようかと思ひましたけど、やはり達磨さんの方が――』

と云ひかけて、彼女はパツと赤くなつた。馬鹿達磨の異名は、彼の戰地通信で彼女は先刻御承知なのだ。

『足なら何本もつけられると思つたんですか』

まさか蛸ぢやあるまいし――と云ひたかつたが、達磨上等兵は遠慮した。

『はゲ。それに達磨さんは、目玉よりか、足が欲しくていらつしやるだらうと思つたもんですか

ら――』

『あゝ、貴女らしいなア。達磨の氣持を察したんですね。なるほど、足を無くするほど修業した達磨さんだ。百本でも千本でも、足を贈呈したいですね』

上等兵は俄然感激したが『しかし、足も八本なら蛸や烏賊並で可笑しくないけど、七本とは、はゝゝ、全く馬鹿達磨ですね』

つい、御自分の綽名を口走つちまつた。

『いえ、決して、そ、そんな――』

彼女は惶てゝ『貴方から「今日の戰鬪にも、無事生き殘つた」とお便りがある毎に、足を一本達磨さんに付けて、お燈明を差し上げてをりましたの。この七本の足は、あたしから貴方に差し上げる勳章でございますわ』

彼女は何時の間にか涙ぐんでゐた。『どうぞこれをお持ち歸り下さいまし』

彼女は七本足の達磨を、達磨上等兵の胸のポケツトへ入れようとした。だが入らなかつた。ポケツトが小さ過ぎたのか、それとも彼女の指が顫へたのか――

『光ちやん！』

初めて彼女の名前を呼んだ達磨上等兵の眼からも、涙がポロ〳〵と流れた。再會の人達が涙を

澪して喜び合ふのは當り前だらうが、この二人は今日初めて會つたのに、しかも、この感激の涙！　七本足の馬鹿達磨も、馬鹿にならない。

達磨上等兵は、胸のボタンを外して、その玩具の達磨を、上衣の下へ入れた。胸がボコンと膨らんで見えた。

『達磨のカンガルーですね』

達磨上等兵は、涙の眼で笑つた。

三

あれから三ケ月經つた。

光子さんは、部屋の机の前にポツネンと坐つてゐた。九時四十分の時報が、垣根の向ふの家から聞えて來た。

『あら。まだ起きていらしたの？』

木戸の方から廻つて來たらしく、靜枝さんが、部屋の窓に顏を出した。

靜枝さんは幼稚園の年少の同僚で、この家に同居してゐる。先刻光子さんは、靜枝さんに映畫

を誘はれたのだけど、氣分が勝れないと云つて斷つたのだ。

『この二三日、お便りがないけど、何うなすつたのかしらッ』

部屋へ上つて來た靜枝さんをつかまへて、光子さんは、いきなり訊ねた。

『厭ねえお姉さんは。戰地へ行つたんでもないのに、まだ達磨さんのことを、そんなに心配になるのッ』

靜枝さんは立つたまゝ、可愛い頰をふくらました。彼女は、人の居ない所では光子さんをお姉さんと呼んでゐる。

『あたし、自分でも分らないのよ。あの方の命の心配はないと思ふと、却つて色々なことが不安になるんですもの。かういふのを、未練といふのかしら――』

光子さんの視線は、靜枝さんの足許にぢつと注がれた。

達磨上等兵は、今郷里へ歸つてゐる。彼と光子さんは既に結婚の約束をした。

達磨上等兵は、北支の鐵道の方の就職が定つて、村役場を辭めて再び大陸へ行くことになつてゐるのだが、しかし其れには、夫婦で一緒に行くか、でなければ、結婚證明書が必要だつた。

二人は急いで結婚しなければならなかつた。

だが歸國して見ると、其處には別な緣談が彼を待つてゐた――といふことを、彼女は彼の手紙

で知つた。相手は素封家の娘で、極力その緣談を彼に强ひてゐる父親は、光子との結婚には絕對に反對してゐると、彼の手紙に書いてあつた。

『でも、皮肉なもんね。戰地の部隊長が、あんなに同情して下すつたのに、却つて內地に反對者があるなんて――』

靜枝さんは意味ありげな笑ひを浮べて、光子の褥に坐つた。この靜枝さんも、初めは二人の結婚には反對だつた。しかし、彼女は光子さんとは特別親しい仲なので、たゞそんな嫉妬を云つて見たい程度だつた。だから、今ではもう、二人の同情者になつてゐる。

『男はアツサリしてると思つたら、いざとなると、女よりか男の方が頑强いのね』

光子さんは、つい、思つてることが口に出た。

『何のこと？　それ――』

靜枝さんは聞き逃さなかつた。

『結婚反對者のことよ。貴女はアツサリ轉向して下すつたけど、田舍のお父樣は仲々難かしいらしいわ』

『だからお姉さん、あたし初めからさう云つたぢやないの。男なんて厄介な代物だからつて』

靜枝さんは同性愛の片鱗を示した。

『でも、財産とか名望とかの問題があるんですから、お父様が私達に反對なさるのも無理はないわ』

『あら。財産なんか何ですか。お姉さんほどの女性が、たかゞ田舍の娘さんに負けてたまるもんですか。しつかりなさいよ』

今度は靜枝さん、忽ち同情者の片鱗を見せた。

『でも靜枝さん。あたし、あの方より七つも年上ですもの。お父様の立場になつたら、二の足を踏むのは無理はないわ』

光子さんの言葉は必ず、『でも』で始まつて『無理はない』で終る。消極的で且つ內省的である。

大體、『あたしの許婚者も戀人も、二人とも死にましたから——』などと、殊更、戰地の彼へ書いてやつたのも、彼女のさういふ氣持からだつた。深い交際にならない中に、彼に諦めさせようと思つたのだ。彼女は文通してゐるうちに、達磨上等兵が好きで好きでならなくなつた。その好きな達磨上等兵に、諦めさせようとしたのも、彼の幸福を考へたからだ。彼に、今迄の許婚者や戀人の運命——死を負はせたくない。

自分が好きになる男は必ず死ぬ——これが彼女の信念（?）だつた。それで達磨上等兵への手

紙で、暗に警戒したのだ。だが相手は、名にし負ふ馬鹿達磨だつた。二人は結局深い交際になつてしまつた。

『お姉さんは駄目ねえ。そんなにクヨ〳〵してたら、死んじまうわよ』

靜枝さんは腹立たし氣に叫んだ。

『えツ?』

光子さんは、惚乎として靜枝さんを見詰めた。彼女は恰度、そのことを考へてゐたのだ。自分の戀愛には必ず死が伴ふ。二度あることは三度あると云ふが、彼は芽出度く歸還した。すると、死ぬのは今度は自分の番ぢやないか——。今度の戀愛が駄目になつたら、もう自分は生きる氣力はない——さう考へてゐたところだつたのだ。

『お姉さん元氣を出しなさいよ。かういふ時に、マスコットにお祈りするのよ』

靜枝さんに云はれて、光子さんはハツと本箱の上に目をやつた。だが彼女のマスコット、七本足の達磨さんは、其處になかつた。さう云へば、あの日彼の胸に入れられて、何處かへ行つてしまつたまゝだつた。

『靜枝さん。あの達磨さんは、もうこのお部屋にゐないのよ』

さう云つて、光子さんは窓の所へ立つて行つた。靜枝さんに涙を見られたくなかつたのだ。

四

『あたし、こんな幸福な氣持で、貴方に二度とお目にかゝれるとは思ひませんでしたわ』

光子さんは達磨上等兵に云つた。

まるで戰地から歸つた人を出迎へた時の樣な挨拶だが、全く今度こそ再會である。達磨上等兵は急に鄕里からやつて來たのだ。

所も、曾て彼の歸還を出迎へたあの〇〇驛前の宿屋だ。あの時は再會でなく、初會見だつた。

『しかし光子さん。これから猛烈に忙しいですよ。直ぐ結婚式を擧げて、大陸へ行くんですから――』

達磨上等兵はソワ〳〵しながら、喜びを隱し切れない面持だつた。彼はたうとう、光子さんとの結婚の許を、父親から得て來たのだ。

『あたし、まるで夢の樣で――』

光子さんは顚へ聲で云つた。これも、彼の歸還を出迎へた時に、云ふべくして云ひ得なかつた言葉だつた。『お父樣が、よく許して下さいましたわねえ』

『親爺は實に頑固な實利主義者ですからね、弱りましたよ。僕も實は駄目かと諦めかけたんですが、最後に思ひついて、これを親爺に見せたんです』

達磨上等兵はスーツケースから、例の玩具の達磨を取り出した。『これを見せて、貴女の眞心を說いたら、親爺も、たうとう、うんと云ひました。これも、皆貴女のお蔭です』

『いゝえ、達磨さんのお蔭ですわ』

彼女は摺り寄つて、彼の手から、懷しさうに達磨を受け取つた。

『あら！』

彼女はビツクリして彼の方を振り向いた。何時の間にか、達磨の足が殖えてゐるのだ。不恰好な足が、しかも二本！

『親爺が僕達の結婚を許してくれたんで、そのお祝ひでさア』

達磨上等兵は、新しく生えた二本の足を眺めて笑つた。

『まア――。でも、何うして、二本一時に――？』

『僕のお祝ひは貴女のお祝ひ。これからは何でも、僕達は複數で行きませう』

『でも八本足なら蛸や烏賊並に一人前ですけど九本足の達磨なんて』

彼女に思はず吹き出したくなるのを耐へたが、彼の『僕達は複數』といふ言葉が、グツと胸に

來た。この結婚が駄目だつたら、彼女は、一人で死ぬ覺悟を決めてゐたのだ。

『さうか。八本足なら一人前だけど、九本足ぢや蛸にもなれないのか。なるほど――』彼は感心して彼女のマスコットを眺めてゐたが『馬鹿達磨の子はやつぱり、馬鹿達磨だなア』

光子さんはこの時不圖、彼が『達磨のカンガルーですね』と云つた事を思ひ出した。その途端に何とも云へぬ可笑しさがこみ上げて來た。我慢すればするほど可笑しさが募つて來た。十七八の乙女時代みたいに可笑しさで、胸が波打つて、達磨を持つ指先がその度毎に顫へた。

『ハヽヽ。前の主人の手へ歸つたので、達磨が喜んでる。馬鹿達磨の蛸踊りだ』

達磨上等兵は愉快さうに笑つた。

光子さんは、もう我慢が出來なかつた。何うにでもなれと、疊に俯伏した。だが、彼女の口から洩れたのは、意外にも、笑ひ聲ではなくて嗚咽だつた。これには實際、彼女自身驚いた。をかしいわ、をかしいわ――さう思ひながら、彼女は何時までも泣いてゐた。自分で、笑ふつもりだつたのに、泣き出すなんて、賢明な光子さんにも似合はない――何うやら、彼女も達磨上等兵の細君になる資格が出來た樣である。どうかお二人が幾久しく幸福であられんことを――。

將棋大佐とピアノ夫人

息子が中學の三年位になると、何處の親でも、そろ〳〵子の將來を心配し出す。

退役陸軍大佐淺見氏もその例に漏れなかつた。殊に淺見氏の場合は、令息熊虎君が後にも先にも掛け更へのない一人つ子であるだけに、その心配も並大抵でないらしい。

『なアお豐。熊虎の奴はどうも軍人にはなれさうもないのう』

淺見氏は昨夜熊虎君と一寸したイザコザがあつた後なので、ツイ愚痴が出た。

『やつぱり生れつきでございますから、好きな道をやらせるほかございませんでせうねえ』

淺見夫人は、母親だけに、とかく熊虎君の身になつて考へる。

『好きな道をやらせるつて、家は代々軍人の家柄ぢやないか』

『それはさうでございますけど、あれはあの通り體が弱いですし、それに音樂の方では仲々天分があるつて麻布の叔母様も仰有いますし——』

麻布の叔母様といふのは、淺見氏の令弟で外交官である正助氏の夫人である。

『大體、麻布の叔母が怪しからん。軍人の伜にピアノを教へるなんて』

『あなたはさう仰有いますけど、麻布ではね、大森の叔父様は聯平に將棋ばかり教へなさるので

ます〳〵勝負事が好きになつて困るつて云つてらつしやるさうでございますよ』

聯平君といふのは、これも亦、正助氏の一人つ子で、やはり中學の三年生、だがこれは又熊虎君とは正反對で、凡そ外交官の子供らしくなく、喧嘩と勝負事が飯より好きなのである。ところが、この亂暴者につけられたところの聯平といふ名たるや、恰も歐洲戰爭が終熄して世界は平和となり、國際聯盟が成立した時に生れたので、正助氏が外交官精神に立脚して、聯盟の聯と平和の平をとつて聯平と名付けたといふ因緣があるのだから、愉快だ。

『勝負事が好きになつて結構ぢやないか。將棋は由來武將のすさびで、戰略と戰鬪心を養ふ點でこれ以上のものはないんぢや』

『でも麻布では聯平さんを外交官に仕立てたいと思つてらつしやるんでせう。それが餘り戰鬪的になられちや、いかゞなもんでございませうか』

『お前も分らない女だ。有爲の青年が、何も苦しんで外交官などにならんでもいい。あの聯平は外交官には勿體ない奴だ』

『あなたは他處の子ばかり賞めてらつしやいますけど——』

『いゝ奴はいゝと賞めるのは當り前だ。うちの熊虎と取換へたい位だ』

『いくら何でも、そんな酷いことを仰有るものぢやございませんわ。ボンちやんが可哀相でござ

います わ』

『ほら〳〵、それがいかんと云ふのだ。何時までも赤ん坊みたいにボンちやんボンちやんなどと——。熊虎といふ立派な名があるのに、何故本當の名を呼ばん』

『でも小さい時から呼びつけた名でございますもの』

『いかん。ボンちやんなどと呼ばれてるから彼奴何時までも意氣地なしなんだ』

淺見氏が、生れた男の子に熊虎と名付けたのは、勿論熊や虎の如く勇猛なれとの親心だつたのであるが、それが何時の間にかボンちやん〳〵と呼ばれるやうになつたことは、淺見氏大いに心外なのである。熊虎君は赤ん坊の時からピアノが好きで、麻布へ遊びに行く毎に『ボン、ボン』といつて正助氏夫人にピアノをせがんだのであつた。それがピアノの名手である正助氏夫人には嬉しくて『ボンちやん』といふ愛稱語は抑もこのピアノ夫人から創まつたのであつた。だから、ピアノ夫人にしてみれば、こちらこそ聯平君とボンちやんとを取換へたい位であるのに違ひない。世の中はうまく行かないものである。

『いゝえ、あなた。あの子は決して只の意氣地なしではございませんわ。あれで中々忍耐强うございます。たゞ音樂のほかのことでは、頭の働きが少しユックリしてゐるだけでございますわ』

『そ、それがいかんのだ。シーザーは馬上にあつて一時に二つの命令を發したとある。來り、見

たり、勝てり、この調子でシーザーは天下を取つたのだ。兵は迅速を尙ぶ。頭の働きがユックリしてゐたら、軍人として、まるでゼロぢや』

『でもあの子は親思でございますのよ』

貞淑無類な淺見夫人も、愛兒の爲には手を更へ品を更へ、大に自說を主張する。

『親思ひでも何でも、あゝいふ意氣地なしは將來の見込みがない。昨夜のざまは何だ』

何と云つても我が子、淺見氏とてボンちやんが憎いといふのではないが、昨夜はついお得意の癇癪玉を破裂させたのである。

事の起りは、やはりピアノだつた。

『お父さん。僕、ピアノがあるといゝなア』

夕飯の後、さも思ひ餘つた末のやうにボンちやんが恐る〳〵伺ひを立てたものである。

『何を云ふ。ピアノは女のものだ。將棋をやれ將棋を』

淺見氏は一蹴した。

『だつてお父さん。ピアノは男でも彈きますよ。外國の偉い音樂家は皆男です』

『馬鹿野郎。とにかく儂はピアノなんか嫌ひだ。大砲の音の方がよつぽどいゝ。音樂なんて、軍歌があれば澤山だ』

『僕だつてお父さん、大砲の音は好きですよ。軍歌だつて大好きです。だつてお父さんがお酒を召し上がると、何時も歌ひなさるんでせう。僕、よく憶えてる。ここは御國を何百里――。でもねえ、お父さん。僕、作るならモツトいゝ軍歌を作りたいんです。一八〇九年の普佛戰爭の時、ハイドンは病氣で寢てたのを、大砲の響に飛び起きてピアノを彈いたといふんぢやありませんか、自分が作曲した愛國の歌を。ピアノは音樂會の時だけ彈くんぢやないんです』

『そんなこと、お前に聞かんでも分つとる。だが外國は外國、日本は日本ぢや。一朝有事の際はピアノ百臺よりも小銃一挺の方が遙かに物を云ふ。ピアノなんか買つてやらん』

『でも、始終家で稽古するピアノがないと、腕が上らないんですつて』

『馬鹿。軍人の息子たるものが、ピアノの腕なんか上らんでもいゝ。ピアノなんて以ての外だ』

かう云はれては、それでもと云ひ返すことが出來るほどのボンちやんではなかつた。詰らなさうに自分の部屋へ引込んで、しばらくして寢てしまつた。お母さんたる淺見夫人が可哀相に思ふのも無理はないのである。

『昨夜だつて、あれが寢てから行つて見ましたら可哀相に枕が濡れてましたわ』

『叱られて泣くなんて、呆れ果てた意氣地なしぢや』

淺見氏は由來、男の子の泣くのと女の子の喋舌るのが大嫌ひである。

『アノ、麻布のお坊ちやまがお見えになりました』

其處へ女中が云ひに來た。

『ナニ聯平が來た。さア〳〵此處へ通した通した』

決して泣かぬ男の子がやつて來たので淺見氏忽ち機嫌が直つて大歡迎である。

『叔父さん。ボンちやんは？』

學校の歸りと見えて、聯平君は制服でドシン〳〵と入つて來た。制服も帽子も垢と穴だらけである。ピアノ夫人がちやんと上等な服を揃へてゐてくれるのに、聯平君はそれを着るのが嫌ひで、何時もこの古帽子、古洋服を着て喜んでゐる。

彼の學校での綽名はケダシといふのである。そも〳〵、中學生の綽名には二種類あつて、一見してその由來が分るのと、顏を見ても名前を見ても、どうしても分らないのとある。たとへば太福といふ綽名があつたとする。その顏を見ると秀麗な細造りである。名前は劍持といふイカメシイ字である。ところが中學生の神經は劍持の持から餅を聯想し、次に、餅の中での愛嬌者大福餅をそれと結びつけ、やがてそれを言語學の理論通りに大福と單純化して了ふのである。聯平君の

『蓋し今や日本は非常時にして――』

と聯平君の教室でやり出したことがあつた。忽ち教室はワツと沸いたのであるが、何も知らないその先生は自分が揶かはれたものと思つて眞赤になつたのを、殊勝な生徒が居て、

『先生。あれがケダシといふ綽名で、これが非常時といふ綽名なんですよ』

と、親切にも聯平君と、も一人の非常時君とを先生に紹介したのであつた。先生、見ると、非常時君は成程いかにもイカツイ顏をしてゐるので直ぐその謂れが分つたが、聯平君のケダシは何うしても分らなかつたのだ。その先生神經質と見えて、それからもよく聯平君を注意してゐたところ、或る日學校の門を出る聯平君を後から見て、突然腹を抱へて笑ひ出したといふのである。

『ケダシとはよかつた。なるほど』

先生が喜んだのも無理はない。聯平皆の帽子には大きな穴が開いてゐて、其處から一束の髮の毛が天を衝いて出てゐたのだ。蓋し、毛出しの名に恥ぢぬ勇ましさである。かういふ謂れのある帽子を被つて平氣な位だから、ケダシ君はちつとも身なりに構はない。外交官夫人であるお母さんから『あなたは野蠻人みたいね』と云はれるわけである。『少しは大森のボンちやんを見習ひなさいよ』これが彼のお母さんピアノ夫人の口癖である。ところが、うまくしたもので、このケダシ君とボンちやん、無二の親友だから面白い。だから大森の叔父樣の家へ來ても最初に彼の口から出る言葉は何時も『ボンちやんは？』である。

『熊虎はまだ歸らない』

淺見氏は決してボンちやんとは云はない。必ず熊虎である。

『遲いんですねえ』

『ボンちやんはね、今日野外教練で戸山ケ原の練兵場へ行つたんですつて。三年になつて、はじめて銃を持つて行けるんだと云つて、とても喜んでましたよ』

淺見夫人が側から云つた。

『さう？　雨が降つて來て可哀相だなア。ボンちやんは體が弱いからなア』

喧嘩好きで通つてゐるケダシ君も、なかなか友情に厚い。

『なアに雨ぐらゐ。儂が日露戰爭で出征した時なんか、瀧の樣に雨の降る滿洲の曠野を軍歌を歌つて進軍したもんぢや』

『また叔父さんの十八番がはじまつた』

お氣に入りのケダシ君だけあつて、遠慮がない。その遠慮のないところが、また淺見氏には嬉しいらしいので、さう云はれると、もう相格を崩して、

『生意氣云ふな。さア、將棋をやらう。今日も負かしてやるぞ』

『叔父さんなんかに負けるもんですか。今日は僕、自信があるんだから』

二人は忽ち將棋に無中になつた。

雨はだん〳〵強くなつて來た。

『どうしたのかしら。もう歸つてもいゝ頃なのに』

淺見夫人は心配さうに獨り言した。

『遲いですねえ。野外教練でも大抵今時分には歸るんですよ』

ケダシ君はボンちやんとは學校こそ違ふが、同じ三年生なので、その邊の消息には通じてゐる。

『なアに構はん。軍人になれんやうな奴は死んでもいゝ』

淺見氏はどうも強いことばかり云ふ。

『それは殘酷ですよ。ボンちやんはとても軍人になりたがつてるんですよ。でも體が弱いから、せめてお父さんを喜ばせるやうな素晴らしい軍歌を作りたいつて何時も云つてるんですよ、將棋大佐殿』

將棋大佐とはケダシ君が淺見氏に奉つた綽名である。

『音樂なんかピアノ夫人にまかせればいゝ。そも〳〵ピアノ夫人が怪しからんぞ。ボン〳〵、ピアノばかり叩いて、儂の大事な体を到頭ボンちやんにしをつた』

『僕のお母さんの惡口を云ふのは止して下さいよ。僕にとつては大事な〳〵お母さんですからね。

え』

ケダシ君は直ぐムキになる。

『だがお前を外交官なんかにしようとしとるぢやないか』

『えゝ。だから僕、外交官になるつもりですよ』

『ハツハツハ。癇癪持のお前が外交官になれるもんか』

『それは叔父さん、認識不足ですよ。これからの外交官はヘナ〳〵ぢや勤まりませんからね』

『馬鹿野郎、中學生に何が分るものか』

『ハヽヽ。また叔父さんの馬鹿野郎が出た。占め〳〵。怒るな〳〵、決して怒るな』

唄のやうに節をつけて唄ひながらケダシ君しきりに駒を動かしてゐる。

『何だい、そりや。怒るな〳〵、決して怒るなんて、儂に說教するつもりか』

御自分が癇癪持だけに淺見氏、氣を廻して御座る。

『いゝえ、これはね、お母さんが僕に教へてくれたんです。聯平は癇癪持だから、一旦危急の時はこの言葉を唱へなさいつて。さうすりや萬事忽ち汝が爲に有利になること夢々疑ふべからずすつて』

『とにかく厭な言葉だな。まるで儂に當こすりを云つてるやうだ。怪しからん』
『まア〳〵、將棋大佐殿。怒るな〳〵。決して怒るな。ホラ、香をとりますよ』
『この野郎。呪文で欺すとは卑怯千萬』
將棋大佐力んではみたが、今日はどうしたものか、駒捌が何時になく冴えない。
何時の間にか薄暗くなつて來た。將棋に夢中の二人は氣がつかないでゐるが、淺見夫人は氣が氣でなくなつた。昨夜泣き寢入りをした可哀相なボンちやんのことを思ふと、ひよつとしたら心得違ひをしたのぢやないかなどと、つい取越苦勞をするのだつた。普段大人しいだけに、思ひつめたら——などと考へ出すと、矢も楯もたまらなかつた。
到頭、こつそり電話室へ行つて、麻布のピアノ夫人を呼び出した。もしかしたら麻布へ行つてるんぢやないかと思つたのである。
『モシ〳〵。うちのボンちやんお宅へ上つてをりませんッ?』
『いゝえ、この二三日見えませんのよ。どうなすつたのかしらつて、聯平が今日學校の歸りにお宅へ上る筈でしたけど』
『えゝ、聯平さんは來てらつしやるんですけど、實はね——』
淺見夫人は相手がピアノ夫人だけに、昨夜の經緯を包ます話したのであつた。

『まア、まだお歸りにならないんですつて? どうなすつたんでせう。もう六時でございますわよ、叔母樣』
電話口でもそれと分かるピアノ夫人の顫聲だつた。その眞情は淺見夫人には嬉しかつたけど、ボンちやんが行つてないと分かると、かへつて、今迄頼りにしてゐた一縷の望みも消えて、どうにもならない切なさが湧いて來るのだつた。
今は顏も靑ざめて部屋へ歸つて來てみると、漸く將棋は濟んだらしく、
『勝つた〳〵。どうです叔父さん。今日こそ兜を脫いだでせう。叔父さんは猪みたいに進み過ぎるから駄目なんだ。好漢惜むらくは外交を知らず』
ケダシ君大變な御機嫌である。
『生意氣云ふな。腕前は儂の方が上さ。お前が厭な呪文を唱へるから、つい駒を讀み違へたんぢや』
『それが僕の外交ですよ。どうです、かう見えてもピアノ夫人の子たるに恥ぢないでせう』
折も折、其處へアタフタと車で驅けつけたのはピアノ夫人である。
『やア、ピアノ夫人、聯平君は見かけによらぬ外交家ですよ。なか〳〵狡い』
將棋大佐は何處までも外交を貶す。

『ボンちやんがお歸りにならないのに、あなたボンヤリして遊んでゐたんですか。早く行つて探していらつしやいよ』

ピアノ夫人はケダシ君を窘めた。

『僕んちへ行かなかつたんですか』

『いらつしやらないから、お母さんが心配して來たんぢやありませんか』

『さうか、變だなア。僕、ボンちやんを迎へに行つて來ます』

ケダシ君はそのまゝ玄關へ驅出した。

『傘を二つお借りしてらつしやいよ』

ピアノ夫人は後から聲で追つかけた。

『アヽこんなに暗くなつちやつた』

ケダシ君は門を出て、はじめて夕闇が濃くなつてゐるのに驚いた。急に胸騷ぎがして來た。ボンちやんは自分の家以外には、歸りに寄道なんかする子でないことを、よく知つてゐただけに、何たか大變悪いことが起る樣な氣がしてならなかつた。

何時もボンちやんが歸つて來る省線の驛の方へ五六間歩きかけた時だつた。

『聯平さアん――』

反對の、後の方から大聲で呼ぶ聲がしたので、驚いて振り返つて見ると、ボンちやんが雨の中を平氣で銃を擔いでやつて來るのだつた。

『何處へ行つて來たの、今時分――』

ケダシ君は思はずホツとしながら後戻りした。

『君、僕トテモ素晴らしい作曲が出來さうなんだよ』

ボンちやんの意外な言葉に、ケダシ君は目をパチクリさせた。

『だつて君、今日教練に行つたんだらう』

『さうさ。だから作曲が出來るんだよ』

ボンちやんは何だか知らないが興奮して顏を眞赤にして近寄つて來た。

『作曲だなんて、君も呑氣だなア。皆心配してたんだぜ』

『濟まん〳〵。でも吃度、スゴイ軍隊行進曲を作つてみせるよ、僕』

『さうかい。僕だつて君、今日は外交でもつて見事、將棋大佐殿を負かしたぞ』

二人は聲高に話しながら玄關へ入つた。

『オウ、歸つて來たか』

二人の聲を聽きつけたと見えて、眞先に玄關へ驅け出して來たのは、さつきまであんなにボン

ちやんの悪口を云つてゐた將棋大佐だつた。

『お父さん。僕ね、今日教練が解散になつてから、雨の降る戸山ケ原を銃を擔いで歩いてたんですよ。そしたら、お父さんのお話を思ひだしたんです。ホラ、日露戰爭の時に雨の降る滿洲の野を行軍したといふ話をね。僕、はじめお父さんのことを思ひ出しながら、こゝは御國を何百里と歌ひながら歩いてたんです。そしたら、とても勇壯な氣持になつちやつて、この氣持で新しい軍隊行進曲をつくりたくなつたんですよ。そしたら、もう電車になんか乘るのが厭になつたんで、そのまゝドン〳〵歩いて來ちやひました』

濡れた帽子を脱ぐのも忘れて、息を彈ませながらボンちやんは玄關から上つた。

『まア、ボンちやん』

大佐の後から驅けつけた淺見夫人とピアノ夫人は、顏を見合せて大きな安堵の溜息をついた。

『ホウ、お前、戸山ケ原から大森まで銃を擔いで歩いて來たのか』

將棋大佐はボンちやんの濡れた肩に兩手をかけて、强い眸視をその顏に注いだ。

『えゝお父さん。お蔭で素晴らしい作曲が出來さうなんです。あれが出來たら、音樂嫌ひなお父さんもきつと喜んで下さいますよ』

『えらい』大佐の聲は顫へてゐた。『お前がそれほどの意氣があるとは思はなかつた。よく歩いて來た。僕は今日、お前に負けたぞ。その軍人精神と忍耐力さへあれば、うむ、あながち軍人にならなくともよい。ピアノを買つてやる』

『えッ。あの、ピアノを——』

そのまゝ、ボンちやんは物を云へずに目を瞠つた。昨夜寢る時には涙で濡れてゐたその目は、今は見る〳〵喜びに輝き出した。

『叔母さん。お父さんがピアノを買つて下さるんですつて』

雀躍してボンちやんはピアノ夫人の方を振り向いた。

『よかつたわねえ、ボンちやん』

弟子思ひのピアノ夫人は、もう鼻聲になつてゐた。

『あなた。あたくし本當に嬉しくつて——』

さつきから、ハンカチで目を拭いてゐた淺見夫人は、辛うじてこれだけ云つて大佐に頭を下げた。

『すごいねえ君。ピアノを買つて貰ふなんて——』

こゝにも喜びを共にする友がゐた。ケダシ君はその逞しい手でボンちやんの華奢な手を握りしめた。

『叔母様。聯平さんも賞めて上げて下さいな。もう立派な外交官でございますわよ。うちの叔父様を外交將棋で負かしたんですものねえ』

淺見夫人は、涙の後の晴れ〴〵とした顏で、ピアノ夫人とケダシ君の顏を見較べた。

『まア、さうでございますか』

ピアノ夫人は、たゞ靜かに微笑みながら、ケダシ君の頭を優しく撫でるのであつた。あんなに撫でられては、もう帽子の穴から毛が出ることもないであらう。

ます〳〵強くなつて來た雨の音も、今はこの五人の耳には、歡びを深める美しい伴奏であつた。

反故詩人

一

さて、北里七郎君は市役所の詩人である。

朝は七時きつかりに目を醒まし、まづ朝刊の將棋欄に目を通してから顏を洗ひ、それから一時間半後には、吸ひさしの煙草を惜さうに棄てゝ省線に乘る。役所では、極めて忠實な庶務課の一員である。勿論、詩は一行も書かない。恐らく讀んだこともないだらう。

だが、北里君の目は赤ん坊の樣に澄み、頰は中學生の樣に新鮮だ。云ふことも、時々人を驚かせる。

『昨夜ね、僕犬の寢言を聞いた』

その口調も、實にそれに相應しく、あどけないのである。

『何の寢言？』

相手は誰でも訊き返さずにはゐられない。

『犬の寢言さ。戀人の夢でも見たんだね。嬉しさうな啼き聲だつたよ』

『犬が戀人の夢を見るのかい？』

『見るさ。僕達だつて見るぢやないか』

『僕達が見るのは不思議はないけれどさ——』

相手は必ず腑に落ちない顏をする。俗人には詩人の言葉は分らないのだ。北里君はかういふ意味で詩人なのだ。

北里君の食事の時の有樣は觀物だ。ちよつぴりと、しかも間隔を長く置いて、さも樂しげに食ひ物を口に運ぶ。決して兵隊さんのやうにガツ〳〵食べない。北里君の食事は空腹を滿たす工作ではなく、味を樂しむスポーツである。

煙草を喫む場合にも、この流儀が出る。愛煙家の例に漏れず、北里君も戸外の喫煙が好きだ。だが北里君には、風の吹く街頭で、スツと一本のマツチで煙草に火を點ける、あのスマートな眞似は出來ない。電柱の蔭に立止まつて、三本も四本も、甚だしい時は十本もマツチを無駄にしてやつと一服にありつくのだ。

『マツチはよく燃え切らないと、點けた煙草が不味くてね』

不平さうに風の中で立つて待つてゐる連れに、北里君は何時もさう云つて詫びるのだ。北里君には、マツチや時間の浪費は問題でないのだ。問題は煙草の味である。こゝにも、詩を書かない詩人の姿がある。

以上は、あまり實害のない癖であるが、中には細君から苦情の出る癖もある。例へば葉書を書くとき、葉書の反故を澤山作る癖などそれだ。北里君は、名士が揮毫する時の樣な裕かな態度で、瓦斯修繕依賴の葉書などを書く。墨の色、字配り、文章を丹念に吟味するのだから、自然反故が澤山出來る。

マッチと違つて、一板一錢五厘の葉書だから、數にすると安くない。當人はいゝ氣持で反故つくりのスポーツに遊んでゐるのだが、見物人の細君が承知しない。中々喧しい細君なのである。

『貴方　そんなに葉書を無駄にして、勿體ないぢやありませんか。他の紙で稽古してから淸書なさいよ』

『どうも、葉書でないと感じが出ないんだよ』

『名士でもない癖に、感じだなんて生意氣ね。貴方がその調子だから、家ぢや貯金が出來ないんだわ。あたし今日、ビール瓶を屑屋に拂つて折角七錢儲けたのに、貴君が葉書を五枚反故にしたから、結局五厘の損よ。どうしてくれるの？』

と、五厘の啖呵を切つた。

『ビール瓶と云へばね』と北里君の目は急に輝いて、

『ビール瓶の歩く格好は面白いぞ』

『馬鹿々々しい。ビール瓶が歩くもんですか』

細君は相手にしない。

『ところが歩くんだ。この間ビール會社の友達のところへ行つたらね、見せてくれたよ。ビールの空瓶が兵隊さんの樣に並んでコツトン〳〵と機械にかけられて歩くんだ。その途中で綺麗に洗はれて、ビールを詰められて、レツテルを貼られて、歸つて行く時はビールでお腹が一杯さ』

『ビール瓶がさ』

『ビール瓶がビールでお腹一杯で歸るなんて可笑しいわ』

『確に歸つて行つたぜ。コツトン〳〵と歩いて』

『だつて、それは機械の所爲でせう』

『うん。それはまア、さうだ。だけど僕も會社でビールを御馳走になつて、千鳥足で門を出る時に、こりやまるでビール瓶みたいだなと思つたよ』

『どうして？』

『門を入るときは素面で、門を出る時は赤い顏だらう。まるでビールの空瓶が、洗はれてビールを詰められて、出て行くのと同じぢやないか』

『それは貴方。ビール瓶が貴方に似てるので、貴方がビール瓶に似てるのぢやないわ』

『變だナ。僕にはどうもそうは思はれん』

北里君は納得の行きかねる顏をした。

一

北里君のマツチや葉書を反古にする癖も、その淵源に遡つて見ると、世の凡ての癖と同樣に、やつぱり戀愛がその發端だつたことが分る。

北里君は學生時代から女に好かれた。所謂 Behy face で、云ふこと爲すことが罪がないから何となく女の心を惹くのだ。この『何となく』が曲者で、誰だつて相手の美點を認めてから戀をするものではない。戀をしてから美點を數へ上げるのだ。つまり凡ての戀は『何となく』から初まると云つてよからう。殊に御婦人はさう仰有る。

『北里の奴、どんな戀をするんだらう』

これが學生時代に、彼の友人間の話題だつた。この噂が當人の耳に入つたのが、いけなかつたのだ。『どんな戀を——』と注目されてゐることが分ると、とかく『こんな戀ぢや仕方がない。

もつと人前に出せる樣な戀をしなくつちや』といふ氣持になる。これでは自分の爲に戀をしてゐるのか人の爲に戀をしてゐるのか分らなくなるが、つまり、答案を書く氣持と云つた方が一番適切だらう。人に見せる答案を書くには手習ひをしなくてはならない。自然反故が澤山出來る。

北里君は、さういふ譯で、隨分澤山の戀を反故にした。北里君のは戀愛三昧ではなくて、反故三昧だつた。

それでも、中には仲々味な戀もあつた。何時も胸を晴れ〴〵と浮立たせてくれる戀人、しつとりと心を潤してくれる戀人、口を利かないで瞳で思ひを送つてくれる戀人、この三人が同時に北里君の前に現れたことがあつた。初めの女を北里君は晴天の戀人と呼んだ。次の女は雨の日の戀人、終ひのは曇りの日の戀人。

結局、この三つの戀も反故になつたのだが、北里君はその當時、晴天の戀人が一番好きだつた。だが、結婚してから夢に見るのは何時も、雨の日の戀人である。夢の中では、北里君も戀人も十七八の子供になつて現れるといふのだから、飽くまで北里式だ。だから何時までも子供つぽい顏をしてゐるのかも知れない。

同時に晴天雨天曇天と、三人の天女を慾張つた天罰か、北里君の細君は大變な女だつた。

尤も、これは戀愛結婚ではなかつた。戀愛には見切りをつけたので、見合ひ結婚と洒落れたの

だ。北里君は何しろ『何となく』の方だし、細君も相當な美人だつたし、この見合は一回で成功した。北里君はこの結婚によつて、晴天雨天曇天のほかに、もう一つ氣象學的女性があることを發見した。

北里君の細君は、實に、雷女房だつたのである。何かといふと直ぐ、ガラガラビシヤンと來る。相手が子供の樣な北里君だから、餘計暴れてみたくなるのかも知れない。

女房の雷にやられた晩は、北里君はきつと昔の、雨の日の戀人を夢で見る。雨と雷だから、緣があるのだらうが、北里君の場合は、雨が雷を呼ぶのぢやなくて、雷が雨を呼ぶのだから、何處までも反對だ。

『よかつたわね、逢へて』

『よかつたねえ。もう逢へないかと思つた』

『あたしが來たから大丈夫よ。あら、今日も泣かされたの？』

『うん。だつて——』

『もう泣かないでね、いゝ子だから』

『泣かないから、行つちや厭だよ』

ざつと、こんな夢である。戀をしてゐた時は答案氣取りで濟まアして居た癖に、誰も見てゐな

い夢だと思つて、だらしのないこと夥しい。まつたく、犬だつてこんな夢は見ないだらう。もつと優しな夢を見るに違ひない。

ところが、この雷の樣な細君にも、心配なことが起つた。それは、彼女が姙娠したのである。しかも『どうも双生兒らしいですわよ』と産婆さんに宣告されたのだ。さう云へば、お腹も並々ならず大きいし、胎動も正しく尋常でない。

『どうしませう。あたし心配だわ』

細君は産婆さんに愬へた。かうなると雷女房も意氣地がない。『雷は强し、されど母は弱し』である。

『双生兒とは凄い。人間も犬みたいに一時に澤山生める樣になつたんだね』

北里君は大喜びである。

『貴方ッ！』

雷女房の目には稻妻が光つた。北里君は思はず二三歩後へ退つた。

『犬のお産の樣に輕いと云ひますから、奥樣もきつとお輕いですわ』

産婆さんが取做してくれたので、北里君危く落雷を免れた。

三

學生時代に友人の話題になる樣な男は、結婚してからも兎角同僚達の話題になる。

『北里の奴、近頃大變な張り切り方だね』

『女房が双生子を生んだんだつてね』

『オヤ。もう生んだのか』

『さア』

聞かれた男は平氣な顏だ。まつたく『生む』と『生んだ』の違ひなんか、噂には重要ぢやない。

『まだ生まないんだらう。だが彼奴の話を聞いてると、もう生んだ樣な感じだね、産衣や何かもう二揃ひづゝ作つてあるさうだし、名前もちやんと二人分考へてあるんださうだ』

第三番目の男が口を出した。

『双生子ぢや大變だね』

『うん。赤ん坊が三人になるからね』

『おや、もう一人居たのか。初産ぢやなかつたのか』

『初産さ』

『ぢや、どうして――？』

『こんど生れるのは二人だらう。それに北里を加へて三人さ』

『北里を加へて赤ん坊が三人か。これはいゝ。その通りだ』

ひどい奴もあるもので、大の大人をつかまへて赤ん坊扱ひにしてゐる。

『女房も世話が燒けることだらうなア』

『全く、彼奴は頭を洗つてから床屋へ行くさうだ』

『我々は床屋へ行つて洗はせるがね』

『彼奴はお腹が痛むと空腹になるさうだ』

『空腹になるとお腹が痛むのは胃擴張だがね』

『彼奴は何でもアベコベなんだよ。彼奴はきつと、失戀してから悲しくならないで、悲しくなつてから失戀するぜ』

『蓋し奇物だね』

誰も北里君を詩人などと云つてくれる者がない。赤ん坊とか變り者とか奇物とかで片付ける。

奇物變物はまだ我慢が出來る。女房に到つては北里君を狂人扱ひにする。尤もそれには北里君にも責任はある』

『まだ生れないのかなあ。早く生んでくれよ』

『ふざけないで下さいよ。まだ五月ぢやありませんか』

『待ち遠しいなア。早く奴生子が見たいんだけど』

『双生子双生子つて、見世物みたいに云はないで頂戴。人の氣も知らないで——』

『景氣がよくていゝぢやないか。双生子が生れたら、一人は僕の子、一人はお前の子と決めようね。今から約束しとかう』

『馬鹿々々しい。家のものは皆、あたし達の共有ぢやありませんか』

『さうでもなさそうだぜ。いゝ蒲團はお前が寢るし、いゝ茶碗はお前が使ふ。子供も一人生れるなら、お前が獨占しちまひさうだけど、双生子らしいので安心した。お前も二人の子には手が廻らないだらう』

『何も蒲團や茶碗のことまで持ち出さないでもいゝでせう。そんな厭味を云ふなら二人とも貴方に上げますよ』

『いや一對一といふところが妙味なんだ。それで僕とお前で、一つ、藝の仕込つくらをしよう。

どつちが旨く藝を仕込むか、見ものだね』

『藝の仕込つくらなんて、犬みたいぢやありませんか』

『うゝ。犬みたいによく覺えてくれるといゝけれど——』

『何ですつて？』

キラリと細君の目に稻妻が光つた。

『尤も僕は、犬の教育には、經驗があるから、大抵旨く行くと思ふけど』

『氣違ひ！』到頭雷神は怒り出した。『犬々つて、よくもあたしのお腹の子にケチをつけたね。そんなに犬が好きなら犬小屋へ行つて寢やがれ』

可哀相に北里君は、緣側から突き出されてしまつた。

四

波瀾重疊の幾月か經つて、雷女房も終に身二ツ、ぢやなかつた、身三ツになる時が來た。

ところが愈生んでみると意外にも双生兒ではなくて、世間並に一人しか生れて來なかつた。

その上、女の兒だつた。

『どうもお氣の毒樣で――』

産婆さんはお悔やみを云つた。これでは出生ぢやなくて、まるでお葬式みたいである。

『たしかに双生兒らしい徹候がございましたけど、飛んだ見立て違ひをしまして、濟みませんでした』

と産婆さんは大いに自分の不明を詫びた。

『折角産衣や蒲團を二揃ひづつ拵へたのに、無駄になつたわねえ』

雷女房は恨めしさうに云つた。双生兒だと云はれても心配するし、一人子が生れても恨みを云ふ。兎角女は扱難い。

『なアに。そんなもの、反故だと思へばいゝぢやないか』

北里君は慰めた。

『貴方ぢやあるまいし――。こんな勿體ない反故なんてありやしないわ』

女房は仲々諦めない。

さて生れて見ると、北里君は案外赤ん坊に好意がもてなかつた。たゞ見る眞赤な顏で、目も鼻もハツキリしない。それに、泣くのと眠るだけで、何の藝もない。これなら、犬の方が餘つぽど可愛い。北里君は、赤ん坊の傍に居るより、犬小屋の傍に居る方が多かつた。

『貴方ア』

今日も役所から歸つて來るや否や、北里君は犬小屋へ行つて愛犬の御機嫌をとつてゐると、家の中から女房が大聲で呼ぶのだ。

『何だい』

『早く來て赤ちやんのおむつを取り換へて下さいよ』

『おむつなんて、お前がやれよ』

『今、臺所で手が離せないんですよ』

不承無承に北里君は上つて來る。おむつなんて、餘り愉快な品物ではない。

『赤ん坊の世話はお前に一任したいな』

北里君は細君に哀願した。

『だつて、一人は僕に引き受けさせてくれつて仰有つたぢやありませんか』

『そ、それは双生子の場合さ。一人ぽつきりぢや、張り合ひがなくつてねえ』

『貴方は、赤ん坊でも反故がないと物足りないのねえ』

細君は厭味を云つた。

全く北里君は物足りなかつたのだ。その心の空虛を滿たすべく、北里君は今宵街へ出て飲まう

と決心した。

北里君は省線の某驛で降りた。其の驛は、北里君の定期券の範圍外だつたので、賃銀精算所へ行つて、例の如くパスに十錢玉を添へて出した。

何時もなら直ぐ受取券を吳れるのだが、どうしたのか、仲々吳れない。

『お早く願ひます』

北里君は窓口から催促した　驛の外のネオンの輝きを見ると、矢も楯もたまらなかつたのだ。

『ちよつと、こちらからお入り下さい』

驛員は受取券を吳れる代りに、横のドアを開けて北里君を呼んだ。北里君は怪訝な顏で入つて行つた。

『このパスは大分期限が切れてゐますね』

驛員は北里君のパスを指した。さう云はれて、思はずハツとした。見ると、なるほど一ケ月も前に期限が切れてゐる。北里君はすつかり失念してゐたのだ。

『これは〳〵』

北里君は頭を掻いた。

『どうなすつたのですか』

『いやその、實は二つ生むところを一つしか生めなかつた樣な譯で、いろ〳〵反故が出たりして、つい忘れてゐましたよ』

『兎に角、規定によつて二倍の賃銀を頂きますから。えーと、一日往復三十四錢として三十五日分――』

驛員は至極事務的に算盤を彈いた。

『十一圓九十錢です』

『おや〳〵』

北里君は惜しさうに金を出した。十一圓九十錢を出せば、もう今晩の飲み代はなくなる。

『お氣の毒でした』

驛員は金を受け取りながら云つた。

『いゝえ、パスの反故だと思へば何でもないです。反故には慣れてゐますから』

北里君は笑つた。

『御商賣は？』

驛員は尙も追求した。

『いや、どうも――』北里君は赤くなつた。市役所と云ふのが、何となく恥かしかつたのだ。

『當てて見ませうか』

驛員は微笑を含んで北里君を見上げた。

『どうぞ』

『詩人でせう』

『え？』

北里君は目を丸くした。

『どうです。圖星でせう』

『ど、どうして――？』

『それは分りますよ。三十五日も期限の切れたのを知らないでゐたり、それに罰金の出し方の應揚さ。詩人ならではですよ。二つ生むところを一つしか生めないで、反故が出來たなんて、詩作の經驗のある者には直ぐ見當が付きますよ。私もこれで、詩の同人雜誌をやつてゐますからね』

さう云つて驛員は、取り上げた北里君のパスの職業欄に『詩人』と記入した

わが愛する北里君も、遂に罰金徵收入によつて詩人の極印を押された。私は安心してこの邊で引き退らう。

屋根裏の年代記（終）

ユーモア文庫

屋根裏の年代記

昭和十五年十二月二十日印刷
昭和十五年十二月廿五日發行

著者　日吉早苗

發行者　東京市小石川區大塚仲町四一　北原智惠

印刷所　東京市神田區神保町二ノ四二　太平社

製本所　東京市豐島區高田雑司ヶ谷町一ノ二一〇　寺崎製本所

發行所　東京市小石川區大塚仲町四一　東成社
電話大塚(86)四五二〇番
振替東京一一〇三二四番

(價)定價壹圓五拾錢

スウハドッウ・G・P

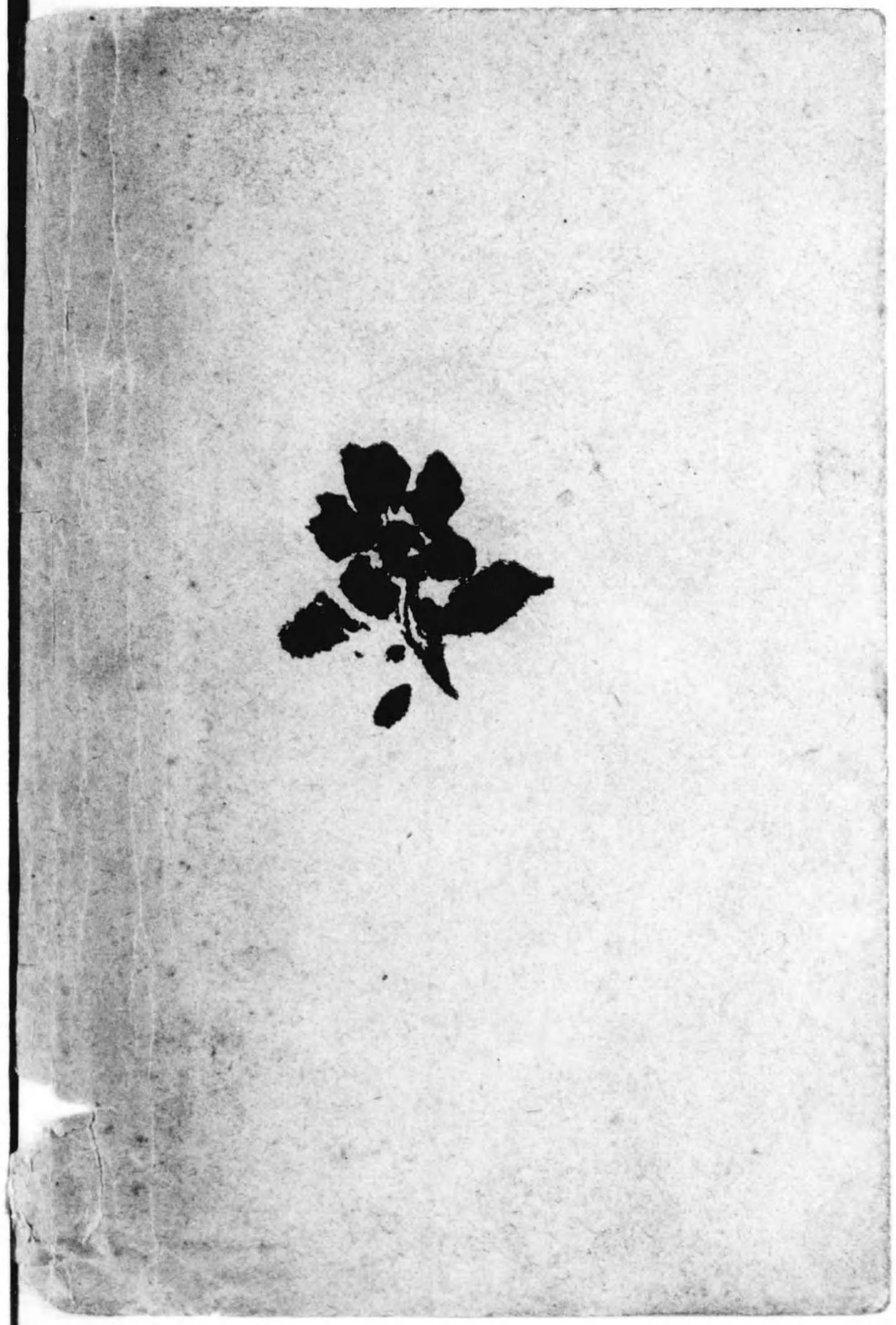
ユーモア傑作集

- 専用心配係・乾　信一郎譯
- 玉子を生む男・長谷川修二譯
- 愛犬學校・岡　成志譯
- 戀の禁煙・黒　豹介譯
- 晴れジーブス・乾　信一郎譯

ユーモア長篇小說集

- 戀人海を渡る・岡　成志譯
- ヒヨコ天國・黒　豹介譯
- 無敵相談役・乾　信一郎譯
- 劣等優良兒・長谷川修二譯

各卷一圓三十錢　東成社刊

409
458

終